

北九州芸術劇場 + 市民共同創作リーディング

令和元年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集

はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きただ人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。

目次

忘却に向けて

帰り道の妄想

路地裏の懺悔

私たちは、穴に落ちた

よくお似合いですね

セムフのはなし

嘘つきが私の始まり

それでも私は許さない

はなみのはなし

松の皮を削る話

退職の日

サウナと熟れた恋人たち

作	穴迫信一	1
作	穴迫信一	13
作	鵜飼秋子	21
作	鵜飼秋子	35
作	坂井 彩	53
作	坂井 彩	65
作	寺田剛史	77
作	寺田剛史	89
作	山口大器	101
作	山口大器	115
作	渡辺明男	129
作	渡辺明男	141

忘却に向けて

作 穴迫信一

【登場人物】

娘	由美	70代
母	昌美	90代
スタッフ	大野 男	20代

朝。老人ホーム・風鈴会の一階ホール。

スタッフ・入居者・その家族などが複数いて、賑やかで和やかな広々とした空間。

由美、その誰とも違う空気を持って黙って立っている。

その前には母の昌美がいる。車イスである。

昌美の後ろにはスタッフの大野が立っている。

由美 新聞

大野 はい

由美 新聞とって新聞、ないの新聞

大野 あ、少々お待ち下さい。

大野、ホールと壁を一枚隔てて隣接する事務所に戻る。
娘と母、お互い目を合わさない。

由美 今さらって思う？

昌美

由美 私もさあ、全然分かんなかった

昌美

由美

どっちかって言うത്自分で、自分の力で、進むべき道、道っていうか方向を、切り開いて来た方だと思っただけど、だから悩んだりとかね、迷ったり、あ、これどうしようかなあと思ってる間にチャンス逃したり、人に奪われたりするの私小さい頃から知ってるから、大事なもののほど急になくなっちゃうことも知ってるからね、もう何でも即決即断でやってきたのよ、あなたがいなくなってるからの50年。

昌美

由美

負け惜しみじゃなくてね、本当に、私短かったと思ってる。

大野、新聞を持って戻って来る。

大野

由美

すみません（と言って由美に渡す）
ありがとう

由美、新聞を大きく開く

以降、由美は新聞を読みながら、片手間に大野の言葉に返答する。

大野 昌美さん、ずっと気にされてたんですよ、由美さんのこと

由美 ……(新聞を読んでいる)

大野 ほら弟さんたちがいつも来られてるでしょう。由美さんが今何されてるか

とかも知らないみたいでしたから

由美 隠居ですよ。老人なんだから私も。だけど自分で全部できる老人ね私は。食事排泄入浴健康管理美容買い物家事趣味仕事、全部自分でできる老人

昌美、車いすに乗る姿勢は変えないまま、首を微動し大野にゆっくり目線を送る。

大野 (それに気付いて)・・・かつこいいです

由美 かつこいいかしら普通じゃない?

大野 (由美の圧にやられ)あ、すいません、普通です

由美 普通よ(昌美を見て)この人が異常なだけ

昌美、車いすに乗る姿勢は変えないまま、首を微動し大野にゆっくり目線を送る。

大野
由美

(それに気付いて) 異常・・・異常っていうかもう昌美さん95歳ですからあらごめんさい、もうそんな歳だったのね。まあ70も90も若いあなたから見たらそんなに変わらないでしょう？そんなことはないか私まだ70には見えないもん。だけど私なんだかさ、もう年齢とかもそういうのも全部溶けちゃって、この人と、この人私の母、ですよそれはそうですけどね、でもなんだか同い年みたいなね、久しぶりに会った友達みたいなね、そういう気もするんです。だからさあ変にかしまって話したりしないのよ私たち、50年ぶりだからって、お互いそういうタイプじゃね、ないんですはあ・・・

大野

これ(新聞)、今って2000何年だっけ、っていつも見ちゃうのよね分かります、知ってるはずなのに

大野

そうなの、知ってることってすぐ忘れちゃうの、これは年のせい？

大野

あ、いや、分かりますよ、ありますあります僕も

由美

あら、火事これ、近くじゃない？

大野

ああそうです、昨日、すぐその

由美

あらあら、そうなのねえ、こうやって変わっていくのかしらね

大野

こうやって？

由美

私東京から一昨年戻って来たばっかりだからさ、それこそ50年この街のことなんて忘れてたんだけど、今、こんな風が変わってるっていうのはさ、こういう火事とかね、取り壊しとか、お店なら売上不振だとか、そういう不可抗力的な？ロマンチックに言えば運命？みたいなものもあるのかなあって

大野 ああ、そうかもしれないですね

由美 だってかなり残念よ今のこの街

大野 そうですか

由美 私からしてみれば、私の子どもの頃で止まってるでしょう、その時はね、

もつといいところだったんですよ、この街、(昌美に)ねえ

・・・

昌美 (大野に) いったもこんなに静かなの？

大野 あ、ああそうですね、まだ朝なんで眠たいのかも

由美 声も、覚えてないの私、この人の声、あーとかうーだけでも言ってくれ

たら思い出せるかもしれないけど、ほらだんまりだから、私が喋るしかないっていう、変な感じになつてたら言つてね

昌美、車いすに乗る姿勢は変えないままもう戻りたいという顔をして

大野を見る。

大野 (それに気付きながらも) ああいえ

由美 でもほら、言ってくれない、これもしかしてさあ顔をあげてさあ、本人

じゃなくつても分からないかも知れないわね、ほら老人なんて区別つかないじゃない？みんな顔一緒じゃない？赤ちゃんと一緒、区別がないでしよ、オシヤレもしない、メイクもしない、髪型も一緒、やせ細つて、毛は抜けて、目も小さくしよぼくれて、唇はパサパサに渴いてるんだもんみ

んな。あとは何？鼻の形？覚えてないわよねえ、そんなの。例えばさあ今あなた、お名前何？

あ、(名札を見て)大野です

あらごめんなさい、大野さんね、大野さんあなた、今ね、お母さんでもお父さんでもいいけど、ご両親のお鼻の形、思い出せる？

昌美、車いすのまま、由美の良いように話を進ませるなという顔をして大野を見る。

大野 思い、出せ、ます

由美 あらすごい！どんな形？

大野 父は、こう、スツと鼻筋がしっかりした感じで、母は、うん、丸っこい感じですよ。

由美 あなたそれ若いからよ、だから覚えてるんだ。でもそれが普通よね。私なんか50年会ってなかったんだから。もう何にも覚えてなくてもしょうがないと思わない？

大野 は、はあ

昌美、車イスをうつすら動かす

由美 (すかさず) あらどこか行くの？

大野 お手洗いですか？

昌美 (うなづく)

由美 顔、見せてよ

昌美 ・ ・ ・

由美 なんだかバカみたいじゃない？こんな朝からさあ、会いに来てそれで顔も
見せてもらえないなんて

昌美 ・ ・ ・

由美 大丈夫よ、分かりやしなわ私、自信ある

昌美、顔をあげる

由美 (昌美の顔を見て)ふうん、意外と若いわね。90歳だっけ？にしてはう

ん、綺麗綺麗、いいんじゃない？

大野 昌美さん、トイレ行きましょうか

由美 私さ、ずっと東京って言ったでしょ、だからもうさあ方言？みたいなのも、この街の言葉みたいなのか、その語気が強くなっちゃう感じとか、工業都市のさあ、職人たちの口下手な雰囲気とか、もう全部忘れちゃってるのよ、さっきも言ったけどさあ、私が見た18歳までの景色はもうここにはないし、具体的には華やかさ、みたいなものが全部そがれ落とされちゃって薄暗さだけがあるのよ今ここには。それは私の知ってるこの街とは全然違うのね、だから、もう何一つここには残ってないわけ、戻って来

る理由も。東京で隠居した方がよっぽど楽しかったんじゃないかって思うわけ、だけどさあ、この顔がさあ、まだここにはあるわけだな、分かる大野くん、この顔がここにある限りはさあ、私はほんとうの意味では知らん顔できないわけなのよ、私がここで生まれてここで育つてここで捨てられてつていう証明をね、まだ残してるわけ。もうこんなにヨボヨボで、ヨボヨボだけど、かろうじて、なくなりはしてないわけ

昔のことなんて忘れちゃうんだよ本当に私は、だから恨みとかじゃ本当に一切ないの、だけど覚えておく方法もないからさあ、今このね、この人のこのすつとぼけた、年の割には綺麗で、私ともきつと似てるんだらうこの顔がね、私の、わたしだけの、北九州の記憶です。大げさか。だけどもう何にも残ってないんだもん。そんなの背負わせたくないよ私だって、そんなつもりじゃなかったよ、本当に顔見るまではさあ、忘れるためだと思つてたの、もつと嘘みたいに弱弱しくさあ、あるいは甲斐甲斐しく、申し訳なさそうな顔してくれてたらさあ、私だってなんだか吹っ切れてさあ、こんなないじめじゃんつて、老人いじめじゃんつて思つてもう忘れてさ、もうこのまま帰つてさ、夜になったら若い子たちと飲みに行ったりさ、この間友達になつたからね、一人は絵描いてる子、もう一人は本書いててね、話が合うしさあ、私芸術全般好きだから、色々見て来てるからね東京で、だからそういう子たちに刺激もらつていつまでも若くいようつて、老人なんて忘れて遊びまくろうつて思つてたと思ふんだよ。

だけどこの人、全然あの時と変わらないふてぶてしくは？何か？みたいな感じだったでしょう？何しに来たの？って顔に書いてあったのよ、だからなんかそれがもう悔しくて、結局そのすつとぼけを私は見たらさ、あーまだ戦いは終わらないんだって。戦いじゃないか。その、覚えておくこと自体のことを忘れちゃだめなんだって、この人はつきり顔だけでそう言ったんです。何言ってるか分からないでしょう？息子にもよく言われるわ、テンパってる時の母ちゃんおかしって、冷静な母ちゃんが好きだって。だけどねえ、息子に母ちゃんだとか好きだとか言われてる私は幸せですから！ 何？！

昌美
由美 ……大野さん、お散歩行きたい、私
……ほらね、自分のことばかり

由美、新聞をめくると、冊子が一冊パサリ落ちて来る

由美 何これ

大野 ああすいません、これ会報です。うちの。風鈴会の。

由美 (拾い上げ) ああそう

大野 それ差し上げます、今月は作文が載ってますよ。入居者の方の中からいくつか選ばれて載るんです。それで、昌美さんのがね

由美 ふうん、そんな文才あったっけ

大野 毎月テーマが二つあって、今月は毎年秋にうちで開催されている「さん

まのバーベキュー会」のことか「家族との思い出」のことを書いてくださ
いってやつで、昌美さんは、「さんまのバーベキュー会」のことを書か
れています。

由美 でしょうね。家族との思い出なんてないんですから

大野 それが載ってますんで、ぜひ

由美 いらないわゴミが増えるだけ

大野 ああ

由美 今読んで帰ります

昌美 大野さん、外の景色見たいわ、私

大野 ああ、はい

大野、車いすを動かそうとするが、

由美 「タイトル…肉を食わせろ 島田昌美

私は魚が嫌いだ。特に青魚。臭いも見た目のギラツキもその全てが食べ物
のそれと思えない。機械に差す油のようなずるりとした臭気が漂うと、そ
れだけで気分が悪くなり嘔吐してしまったこともある。それを今日はバー
ベキューというわざわざ匂いが立つ形で、焼いて食べようと言うのだから
軽蔑。まだ電子レンジで温めてとかなら匂いそんなに立たないし我慢して
参加してやろうかと思ったがこれは辛い。しかしどうせ参加しなくても、
その会が終われば、燻された大量の老人らが私の近くに寄って来て忌憚な

く喋り散らかす。ああ、想像するだけで気分が悪い。私は昔から肉が好きだ。特に牛肉。ステーキや焼肉が大好物。そのおかげで95歳まで生きて来られたと言っても過言ではない。職員の連中は健康管理やらうるさいが、どう考えても好きなものだけを食べて生きて来た方が良い人生だと思う。私は長生きなんか目指していない。気ままに生きて来ただけだ。そのおかげでストレスも少なく、他人様に迷惑をかけたこともあるけれど、それも結局そこまで気にせずやってきたからまだまだ活力が残っているのだと思う。さんまを食わせて何だと言うのか。魚がうまいとか、好き嫌いが減ったとか、こだわりがないとか、性欲がないとか、花が綺麗だとか月が綺麗だとか、若い頃はこうだったけど今はこうだとか、それで楽に生きて行けるようになったとか、全部若者への負け惜しみでしかない。私は老人ではない。老人にはならない。私は若いままで、自分の衰えに怠けず、今を生きる人の味方です。来月はひれステーキポンド会をやってほしい。私は食う。」

由美

大野

由美

大野

「・・・なんでこれが載ったのよ。
スタッフ一同こう、元気づけられたと言いますか
こんなのに元気づけられちゃダメよあなたたち。」

だからもう沢山お話聞いてたら、本当どう何と言いますか、親子だなあと。

昌美、由美から冊子を奪い取る。

由美

帰ります。

大野 あ、ありがとうございます。また、ぜひ

昌美 大野さん

由美 (昌美に) 外の景色見たいんでしょう、私が外まで連れて行ってあげる

大野 え

由美 うそよ、めんどくさい

大野 はあ

昌美 ・ ・ ・

由美 ひれステキーポンド会やってくださいよ大野くん。こんな人に負けないで。

そしたら私もまた来たい。好きなんです私も。肉。頼んだよ大野くん。
じゃあね。

由美、颯爽とかっこいく、建物から出て行く。

その後ろ姿が大野には、まっさらきんの黄金の輝きに見えた。

おわり。

帰り道の妄想

作 穴迫信一

【登場人物】

ヒロミ 小学5年生

昭和19年4月

下校途中、ヒロミはふと足を止める。

その足には当然靴を履いているのだが、片方はボロボロに破れていて、もう片方はまっさらの新品である。ヒロミが足を止めた理由は、目の前の家、つまり「金子秀子」の家の戸が開き、その隙間から白い手がぬつと出て来て手招きしていて、さらにそこに人が入って行くのが見える。ヒロミが目で追ったときにはもう、体は家の中で、足下だけが見えていて、その足はヒロミとは左右反対に、汚れたり白かったりする靴が履いてあったからそれは、同級生で親友の若島ジョウくんにもう違いなかった。

ヒロミ 僕じゃないぞ!!!!

その声を聞き、玄関に収まり損ねた、新品靴を履いた右足と、扉を閉めようと再び現れた白い手がギクリ止まる。

ヒロミ

この左足が、勝手に水たまりを避ける！車が通る時の水しぶきを避ける！泥を避ける！つま先がこすれるのを避けて、まともに歩けません！こいつは自分を綺麗なままに保ちたく、僕の意志なんかとは勝手に、あらゆる向に僕を誘おうとして、その、その積み重なりが、金子さんの家の前まで僕を、連れて来させただけやから、決して金子さんに用があつた訳でも、ましてや2人の何かを疑つておつた訳でも、毛頭ない！！

足と手、それぞれ止まったまま。

ヒロミ

なんせ片方だけ新品靴、ほらあ！

ヒロミ、綺麗な靴を見せる。

ヒロミ

もう夕方や、もう今日が終わったらそれでおしまい、明日がすぐ始まる。人はヒロミは要領がいいというけれど、ご覧の通り何もいいことなんてない、、、

勇気と体力と根気と僕の知らない言葉いろいろをそのまま奪っていく夜が訪れるまで、僕は金子さんへ向けた言葉をこの開きっぱなしの口に詰まらせることはありえない、、

今、そこにある手を縁取るように見えない光が僕の目に映り込んできている。眩しくて早く引つ込めてほしいけど、引つ込めたら最後、僕は川に飛び込んでしまう恐れがあるのだ、、

そしたら、僕の新品靴は黒く汚れる、一年以上履き潰した右足の靴と同様に、見分けもつかないほどに、、

僕は心を失うようにして、朝が来るのを待てずに、泥の川に飛び込み金子さんも友人も、せつかくの新品靴も無くしてしまう、、

そこに足だけ飛び出した友人は、僕との友情を引き換えに、金子さんを、金子秀子さんを手に入れ、その上、新品靴も汚さずに済む室内に消えていく！

僕は平均以上の健康体です。アメリカの空襲の轟音を無視して爆睡するのが日課なのです、、

この負け犬の遠吠えも、三人だけの美しい秘話、、

足が後ろに戻り、出て来ようとする。

ヒロミ

出て来るな！へびを直接捕まえるより茂みに手を突っ込んでへびを探す方が怖い、、、

早とちりだけは勘弁。僕は冷静。未だ何かの興奮に取り憑かれている僕の方がどう見たっておかしいし苦しい、、、

全てはこの靴のせいだ。ここにこうして到着したことは、両足それぞれが違うベクトルを持ち、互いに譲らず奔走した有様なのだから。

今日の昼、お互い一步も譲らずに「俺が先に呼ばれた」「いいや僕も呼ばれた」ジヨウくん家は金持ちなんやけ好きな時に買えろうが」「ヒロミなんか貧乏なんやけ靴だけ新しくなったって何も変わらんめーもん、すぐ汚すちゃ」「いやだ」「俺も一切譲る気はない」などとやりあった時に真実は潜んでいた、、、

ジヨウくんがそう言い切ったとき教室の後ろの方で金子さんが「もうどっちでもいいけん早よ決めてよ、、、」とポツリ呟いたのを僕もジヨウくんも聞き逃さなかった、、、

こうして手違いで2人に渡された一足の配給の靴は、僕とジヨウくんに片足ずつ渡されることになったのだけど。それぞれが等しくその責任を背負っているということを忘れないでほしい。忘れないこと。これが今の僕たちにできるたったひとつの約束事なのではないか、、

2人には見えない角度で、夕日が差し込んで来ている。降参。これ以上は血が混じる。

手と足、ドアの中にすーっと収まる。

ヒロミ、それを見届けて、ふうと深呼吸する。

ヒロミ、そのまま少しぼうつとして、やがて家路へと歩き出す。

左右がバラバラに進む不安定な足取り。

ヒロミ

このままこの二つの足が真逆に進んで行って、最終的に僕の身体はまっ二つに千切れてしまう、、

いくら空しいからと言ってそんな不思議な死体にはなりたくない、、

それに金子秀子が2つには千切れないのと一緒で、どちらかを受け入れ、どちらかを拒否すればいいだけの話だ、、

でも今はなんとなく、このバラバラの足たちの意志を尊重したいと思う、よい、っと、はっ、あぶ、あぶ、あー、とつとと、

最後に名前を呼ばれたのが僕とジヨウくんではなく、僕と金子秀子だったなら、お互い片方ずつの靴を分け合うことはどんなにロマンチックだったろう。たまに交換したつていい、

左足に誘われるように金子秀子の家に来てしまった僕と反対に、右足が新品の金子秀子は僕の家に着く。それで家を交換した生活が始まる。金子秀子の家のお風呂に入り、金子秀子の布団で寝る。ぐっすり眠ると、金子秀子の母ちゃんの朝ご飯が待っている。量は少ないが優しい味で身体に染み渡る、

そして金子秀子の家から坂口ヒロミが優雅に登校する、

「うちどうだった?」、

「ごめんねうち風呂とか狭いけど」、

「お母さんうるさかったでしょ」、

「うんヒロミくんの家少しボロだけどなんだか落ち着くよ」、

「うんお母さんも優しいしご飯も美味しかったわ」、

ヒロミ、不安定な足取りのまま家路を急ぐ。

おわり

路地裏の懺悔

作 鶉飼秋子

【登場人物】

不良

公務員

教師

店主

小倉の路地裏。

不良と公務員、教師、店主がいる。

不良は、セーラー服を着ているが、着こなし方が独特で、一見ひと昔前のヤンキーのようでありながら、どこかファンキーでお洒落。真っ赤な口紅をしている。

公務員、教師、店主はそつのない、ほとんど似たようなファッションをしている。恰好から職業は推察できない。

不良

だから、小倉には戻って来たくなかったんよねえ。

公務員

そんなことを言わずに。

不良

なんで、大人になつてまで叱られなきゃいけないんですか。

教員

叱るなんて。

不良

叱るんでしょ、だから私を呼び出したんでしょう。

店主

その恰好は？

不良

絶対、言うことなんか聞いてやるまい。そういう心の現れです。

店主

不良ですね。

不良

そういうことです。

公務員

逆ですよ。

不良

逆？

教員

私たちが聞くのです。あなたの話を。

公務員

あなたの人生をお話いただきたいのです。

不良

お前スカートの方が長くてムカつくんだよとかそういう話でなく。

教員

聞きたいのはあなたのお話なのです。

店主

聞きたいんです。うふふ。

公務員

はじめましょう。

間

不良

・この街は本当に相変わらずですねえ。昔っから人は荒いし、だつてヤクザの町でしょう？冬は曇り空ばっか、風も強いし。私の人生もこりや不良になるわけよねえ。

店主

荒いですよねえ。

不良

やっぱりそう思う？

教師

小倉はヤクザの町ではないです。

不良

ヤクザの町なんですよ。昔、着流しを来たホンモノのヤクザを見て、世の中にこんないい男がいるのかと、そりゃあもう、子供ながらに惚れ惚れしたんですから。

公務員

続けて。

不良

ある日、母に捨てられたんです。

店主

んっ？

公務員

続けてください。

不良

お寿司を食べに母が連れて行ってくれたんですよ、弟たちも一緒に。食べ終わって先に帰りなさいって言われて帰ったんです。そしたら、母はそれっきり家に帰って来なかつたんです。

店主

なんで？

不良

知りませんよ。私は小学6年生。なんで、どうして、私は悪い子だったの？ずっとそう思いましたよ。

公務員

続けてください。

不良

中学、高校のあいだ、私は家の家事をしましたよ。全部。弟は小さかった

ですから。

教師 お父様はどうされてたんですか。

不良 父？父には、愛人がいましたからね。

教師 えっ？

店主 あははは。

不良 愛人。まあ、後に結婚しましたから、後妻さんですけど。

公務員 大変な思いをされましたねえ。

不良 そうですねえ。でも、父は私たちを愛情をもつて育ててくれましたから。

私は、お金の苦労はほとんどしてないわけなんです。私も弟たちも、学校

にちゃんと行かせてくれたのは父です。

あなたは、お父様に感謝している。

不良 はい。

教師 しかし、お母さまは憎んでいる。

不良 許せませんね。

教師 あなたの罪はこれですね。

不良 は？

教師 あなたは、お母さまのことを許せない。そんな自分を許せない。

不良 いや、違います。

教師 子として親を許すことができない、大変な罪だとそう感じておられるので

不良 しょう。

不良 だから、全然違います。

教師 親に感謝できない、これは大変な罪です。

不良 ちげえーだろがっ！私、まだなんも悪いことしとらんでしようが！この話のどこが罪なん！やっちゃったのは、母親でしようが！

公務員 続けて。

不良 ったく・・・。

店主 (嬉しくなって) わあ、不良やん。

不良 あん？

店主 (嬉しくなって) うふふふ。

不良 なんかわからんけど、この服着て来てよかったー。私を決め付けるんなら、断固として歯向かいますよ。

公務員

不良 私は、東京に出たんですよ。もう、家にはいたくありませんでしたから。

それで音大に行つて、声楽をやつて、アルバイトはピアノの先生をやつて、そしたら円形脱毛症になつちやつて。

ええ？十円ハゲ？

そう、ピアノの先生はダメ。私、先生はほんと向いとらんちゃ。

(嬉しくなって) 根っからの不良なんだ。

だいたい教師ってのは、子供を自分の想い通りにできると思い込んでる職業なんよ。子供つったつたつて、他人よ、立派な他人・・・

お母さまには、それから会つたんですか？

(イラつとして) それからつて？

不良 教師

教師　ですから、お寿司屋さんの一件から。

不良　会いましたよ。

教師　いつ？

不良　修学旅行のとき。高校のね。東京でね。

あ、そうそうちょうど東京オリンピックのときね。

教師　なぜ会うことに？

不良　私に会いたいわって言ったから。

教師　誰から聞いたのです。

不良　親戚。

教師　なぜ会おうと思ったのですか？

不良　会いたくないけど、会いたいわって言うんだから。

教師　会わないことだってできたでしょ？

不良　親戚がうるさいわけ。生んでくれた親が会いたいわってのに、子が会いたくないとは何事ぞ。この、恩知らずとかなんとか。恩知らず、ってあんた、恩知らずは私じゃなくて母だろが。このっ、くそっ、とか思いながら、仕方ないでしょ。

教師　なるほど。あなたはその時は素直になれなかったけれども、あなた自身は本当は会いたくってたまらなかったはずですね。

不良　はい、そうかもね、はい、続きいいですか。円形脱毛症になったところから。
公務員　続けて。

不良

それから、私はバレエ団のメイクのアルバイトをして、それはね楽しかったんですよ。それから、衣装の仕事とか、雑誌のスタイリストの仕事とか、ほら、集英社ってあるでしょ、non-no、ファッション誌ね、あれの創刊に立ち会ったりもしたし・・・。

店主

不良

えー、すごい。
私はね、自分ができるとか思ったらなんでもしましたよ。雑誌の編集もするし、人んちの犬の散歩だつてするし、家政婦だつてするし。ただね、全く向いてないこともあるわけ、例えば、さっきの教師とか。

教師

罪、あなたの罪は？

不良

あんたさあ。私の話が聞きたいつて言わなかった？

教師

自慢話を聞きたくはないのです。

不良

話には流れてもんがあつて・・・他人をね、自分の思い通りにしようつ

たつてそうはいかないんだから。

教師

あなたには、罪を喋っていただかないと。

不良

罪？

公務員

(教師に小声で) どうしてそうなるんです。

教師

(公務員に小声で) この人を良い方に導かなきゃ。

不良

あんたたち、あら探ししてるの？

公務員

とんでもない。

不良

呼び出しくらったんでなんじゃらほいつて来てみたら、私のあら探しつてそりゃ一体どういう。

教師 私はあなたを救いたいそう思っているのです。

不良 嘘だね。

教師 本当です。

公務員 お話をじっくり聞きたいと思っていますよ。

不良 ふうん・・・じゃ、続けますよ・・・それから、男の子を一人産んだのね。

店主 お、来た。

公務員 ご結婚は？

不良 しないわよ、そんなの。

公務員 しない？

不良 妻子持ちだから。

公務員 え？

不良 私は子供が欲しかったの。私が子供を育てたいの。男の手なんか別に借りたくないの。

店主 おお！

公務員 結婚したいと思わないのですか？

不良 結婚なんかしなくなつて子供はほんとにいい子に育ちましたよ。まあね、私は稼ぐために忙しかったから、ベビーシッターも雇いましたけど、そのベビーシッターがほんとに良くてねえ。まずは、子供の面倒を見る人、それと、男の子だから、男性的な要素を家に入れとかなきやと思つて、キャッチボールができる人、それを条件にベビーシッター探してます、つて広告を出したのね。そしたら、なんと大学の野球部の主将とマネー

ジャーが応募してきてね、即採用ね。私はねえ、彼らにはほんとに助けられたの。

公務員

結婚は必要ない？

不良

子供が欲しかったの。

公務員

子どもを一人で育てるのは大変なことです。

不良

忙しいけど、大変だと思わなかったわねえ。楽しかったわねえ。

公務員

なぜ妻子持ちと付き合うのですか。

不良

仕方ないじゃない、なんでか知らないけど私の目の前に現れる男が妻子持ちなんだから。

公務員

断ってください！

不良

なんで？

公務員

相手の家族が知ったら悲しむでしょう？

不良

悲しむかどうかを気にしなきゃいけないのは私じゃないでしょう。

公務員

あなたには責任があります。

不良

ちよっと待った、私は自由恋愛でしょう。

公務員

あなたには倫理観というものはないのでか。

不良

人が人を好きになるのに、ルールがあるんですか？

公務員

あります、ルールは。必ず、絶対に。

不良

私は、子供ができたから結婚してくれなんて言ったことは一度もないですよ。

公務員

私が妻なら、あなたのような人は許さない。

不良

ねえ、私の人生聞いてくれるんじゃないの？

公務員

私は、神ではありません。

不良

あんたの旦那、浮気でもしてるの？

公務員

・・。

不良

だから、あんたは私を許せないんじゃないの？

公務員

・・あなたは、ルール違反です。

不良

ルールってなんの？

公務員

男女の。この場の。

不良

男女の恋愛にルールなんてあるの。

公務員

あります。

不良

この場のルールって？

公務員

あなたは、自分の人生を語る。あなたは自分がどれだけルールからみ出したかを確認する。あなたはルールを守らなければならない。あなたは、

不良

私の生活に首を突っ込んではいけない。

あははは。わたし、私生活に突っ込んだじゃない！旦那が浮気ねえ、ちよつと可哀想だけど、あなたも機会があったら、ぜひ浮気、してみてください。

ださい。そもそも、お互い浮気はしない、そんなルールを守るために結婚

があるんじゃないと思いますからねえ。

じゃあ、何のために結婚するんですか？

不良

さあ、しなくていいんじゃないですか？

公務員

独身で、孤独な人生、それが幸せなんですか？

不良

結婚して四六時中一緒にいるけど、孤独な人生、それが幸せなんですか？

公務員
不良
公務員
不良
教師
不良

・ルールは、破るほうが悪いのです。
何のペナルティがあるの？誰か制裁を与えるの？
社会が。そして、神が、見逃すわけありません。
わたし、制裁を与えられたことないなあ・・・。
いい加減にしなさい！
はっ？何が？

公務員は、泣き出している。

教師
公務員
教師
不良
教師
不良
教師
不良
教師
不良

(公務員に小声で)しっかりしてください。
・すみません。
他人の私生活に首を突っ込むのはやめなさい。
いや、突っ込むでしょう。だって、人でしょ？
突っ込むなったら！言うこと聞きなさい！
やだね。
間違った態度でいるから、あなたの人生は苦しいのです。間違ったものを
修正するのが、私の仕事なのです。
ねえ、あんたって先生なんじゃない？
・だから、首を突っ込むなって！
やつぱり、そうなんだ：なーんか、やな感じなんだよ、会ったときから。
もう、あなた、帰りなさい。

不良 やーだねっ。

不良は、床に大の字になって寝そべる。

教師 こらあっ！
不良 ぶっ叩いてみる！

教師は、不良にまたがり、腕を、手のひらを、あげる。

不良 こいつ！

しかし、教師は、手のひらを振り下ろすことができない。

不良 どしたっ！さ！こいつ！
教師 体罰は・・・懲戒免職です。
不良・・・先生。
教師 ルールで苦しくなってるのはあんたらじゃないか。

沈黙するしかない。

店主 あはははは！

不良 ・・何なの。

店主 面白いよ！

不良 なが。

店主 お母さん、あなたの人生ってかなり面白い！

不良 ・・。

店主 二人とも講演会をお願いするどころか、あなたの人生に打ちのめされちゃった！

不良 あんたは、何なの。

店主 私は寿司屋。あなたが捨てられた店、あれ、うちの店。この人（教師）は先生。この人（公務員）は役所の人。

不良 あんたは、なんでここにいるの。

店主 二人（公務員と教師）に呼ばれてね。ところが思い出って、それトラウマやん！私、トラウマの店主やん！悪いことしちゃった。

不良 あんたは、なんでここにいるの。

店主 だから呼ばれたから。でも、あなたの人生の話、ほんとすごく面白かったよ！講演会、絶対成功する。

不良 ・・金くれ。

店主 お金？お金は役所が出します。

不良 あんたが、今ここに、金、置け。

店主 ・・。

不良

あんたが、一番狂ってるよ。

不良は、この場を去る。

おわり

私たちは、穴に落ちた

作 鶉飼秋子

【登場人物】

なお

あき

ゆみ

三人 私たちは、中学生、穴に落ちた。

なお 私は、5分前。

ゆみ 私は、4分前。

あき 私は、1分前。

三人 遠足で歩いてたら、私たちは、穴に落ちた。

三人は一筋の光に照らされている。

あき おーい、誰かあー。

ゆみ 駄目なんよ。

なお 誰も気づいてくれんのよ。

あき ちよつとー、なんでわからんのー！

ゆみ 無駄よ。

なお 私なんべんもやつとる、さつきから。

あき 何人も通つとるのに、なんで。

ゆみ あんた、なんで落ちたん。

あき めちゃくちゃ長い列になつとるなあって感心しとつたら。

なお ちゃんと前見て歩かな。

あき こんなところに、大きな穴があるなんて誰も思わんやろ。

ゆみ あれ、10組の高橋君やない？

なお ほんと！赤い紐のシューズ！

あき 10組つて、はよせな、列が終わる！助けてくれー！

なお 高橋くーん、なおでーす、気が付いてー！

ゆみ 高橋くーん、ゆみでーす、いつも見てまーす！

あき 高橋にえらいこだわるね。

なお・ゆみ だつて。(もじもじする)

あき ふうん。(地面に座る)

なお 高橋くーん。

ゆみ 高橋くーん。

なお あ。

ゆみ 気付いた？

なお 来たよ。

ゆみ ほんとに来た。

穴の上のほうから、声が響く。

高橋（声だけ）お前らなんしょん。

ゆみ 穴に落ちたんよ。

なお 上にあげて欲しいと。

高橋 馬鹿やなー。

ゆみ ひどーい。（嬉しい）

なお ねえ、助けて。

高橋 俺ひとりじゃ、無理。

ゆみ 誰かまわりにおらんの。

高橋 みんな先に行ったよ。

なお ええー！

高橋 待つてろ。戻ってくるからな。

高橋は去った様子。

あきは立ち上がる。

なお 行っちゃったあ。

ゆみ 私、高橋君好きなんよね。

なお えっ！私も。

ゆみ いやん。なんでこうなるん！

なお 私、お付き合いしたい。

ゆみ 私だって、付き合う。

なお 私の方が先に言った。

ゆみ 好きって言ったのは私が先やん。

あき お付き合いって、独り占めのこと？

なお 違う。

あき 早いもん勝ちなん。

ゆみ 一緒に帰ったりしとるやん。3組の須賀君と金子さんとか、そうやん。

あき 金子さん、1年のとき、私と一緒に帰りよったんやけど。それ、お付き合い？

ゆみ 違うやろ。

なお お付き合いってねえ、一緒に帰るだけじゃないやろ？わかるやろ？

あき うん・・・？（本当はわかっていない）

ゆみ あんた（なお）は、わかるやろ？

なお わかる。

ゆみ・なお ねえー。

ゆみ （あきに）高橋君と先に付き合っついていいやろうか。

なお （あきに）駄目よ！私が先！

あき 出てからして、その話。

なお・ゆみ ……。

あき 穴の中じゃムリやん、独り占め。

ゆみ 高橋君が助けてくれるやろ。

あき 本当に？

なお 戻るって言ったよ？

あき 見捨てられたんやないかね、高橋に。

3人、上を見上げる。

ゆみ ポカポカ陽気やねえ。

なお 楽しい遠足のハズだったのになあ。

あき なんで、こんなことになったんやろ。

なお 下り坂を歩いとるつもりが、いつまにか穴やったんよ。

ゆみ 私、一人になりたかったんよ。でも降りたらこの人がおったんよ。

あき 穴に進んで入ったん？

ゆみ そうよ、団体行動苦手やん。

あき 信じられん。

ゆみ 穴なんてすぐ出られるしね。

あき 助けてもらわな出られんやろ？

なお どのくらい時間が経ったんやろうかあ。

ゆみ 高橋君が来て5分くらい？

なお いや、もう20分は経つとるんやない。

あき 1時間以上経つとる。

ゆみ せつかく一人になりたかつたのに。

あき 穴は完全にアクシデントやる。エマーゲンシーやん、助けてもらわなこの先どうにもならんのよ。

ゆみ 大丈夫だって、いつか出られるんやけ。

あき いつかって、いつ？ねえ、水は？食料は？トイレは？雨が降ってきたら？

な お 寒くなったら？私たちここで死ぬの？

ねえ、疲れるけんさ、座って話そ。

3人は、地面に座る。

すると、鼻歌が穴の外から聞こえてくる。

あき ん???

あきは、ひとり立ち上がる。

あき ちよつと、あんたー、あたしー、ここー！ねえー、助けてー！

あきの旦那が顔を出した様子。

あき あ、ねえ！助けて！

旦那 はっ（笑う）晩御飯なに。
あき 今、それどころじゃない。
旦那 筍とか。
あき そら、いいいけど、助けて。
旦那 作ってもいいよ。
あき あんたが？
旦那 ふん（自分を指さしている様子）
あき そんなんゆっても、筍つてまず茹でらないけんのよ。
旦那 その辺に生えとるやろ。
あき いや、生えとらんて。ここ、竹藪じゃなからう。
旦那 探してくる。
あき 待つて！まず、ここから私を救つて。
旦那 居心地よかる。
あき は？
旦那 はっ（笑う）
あき えっ・・・。
あき あら。
あき あらじっ？

旦那は立ち去ってしまった様子。

あき　・・・なにあれ、どういうこと。

なお　・・・さあ。

ゆみ　行つてしまったね。

あき　笑つたよねえ。助けてつて言ってるのに。

ゆみ　うん。

あき　笑つて、去る。どういう意味。

ゆみ　あんたがわからんのに、私たちわからんわね。

なお　居心地よかつて言つてたね。

あき　私、ここで、死ぬかもしれんのよ。

なお　居心地、いいよね。

ゆみ　うん、いい。

あき　・・・は？

　　こんなところで一生終えたくないやろ。

　　この穴より広い世界つてどこにもないと思うの。

　　いつか上がれるけ、心配せんでいいっちゃ。

　　何を言つとるん・・・私は死にたくない。肩かして。

　　なんするん。

　　ブレーメンの音楽隊するから。

　　ええー。

　　どうにかして上に出らな。

　　ねえ、この深さ(上を見上げる)・・・

間

なお 私たち、置いてけぼりなの？

あき ・・だって、ここにいたいって・・。

なお 這い上がったとして、あきは、何するの？

あき えっと・・筍を、煮る・・。

なお うん・・じゃあ、あきが一番上ね。

ゆみ えっ！

なお (ゆみに) あき、したいことあるんだって。

ゆみ そんな理由？

なお (ゆみに) 私たち、外に出てほしいことある？

ゆみ いや、ない。

なお でしょ？外に出たら何かしなくちゃいけないくなるんだよ。

ゆみ それは、困るなあ。

なお 何もしたくないでしょ？

ゆみ そっかあ・・じゃ、あきが一番上ね。

あき えっ！

なお 立派だと思っよ。

ゆみ 筍を煮るは、うん立派。

ゆみとなお、肩車をする体制を作り始める。

あき 二人は？ねえ、二人はどうするの？

二人は、笑顔で。

なお 私は、したいことないから。

ゆみ ここって幸せな場所って気がするよね。

なお 夢のある人は外に出るべきだと思うよ。

あき 夢ってそんな・ねえ、助かりたくないの？

なお 助かる？どういう意味？

ゆみ 私、いつか穴に入るのが夢だったんだよね。

なお むしろここに居ることが助けられてるんじゃないかなあ。

ゆみ 誰でも本当は穴に入りたいんだと思うよ。

なお 私たち、偶然幸せを手に入れてしまったの？

ゆみ ここにいれば何もなくていい！天国だよね。

あき ここが？これのどこが天国なの？

なお あきは幸せより、筈のほうが優先なんですよ？

ゆみ 駄目だって。あきは筈が夢なんだから。

あき ふたりは、怖くないの？

なおとゆみは、肩車の体制を作ろうとするのだが、うまくできない。

なお ああ、こらいけん。腰、悪くするわ。

ゆみ ほんなら、私が下になるわ。

なお ダメダメ。ゆみちゃんも絶対、腰痛くなるって。

ゆみ 私、腰強いけ、大丈夫。

なお ダメって、若いときと違うんやけ。

あき 私が下になる。

間

二人 ダメダメダメダメ。

なお 諦めちゃだめ！

ゆみ 晩御飯には、間にあわすけ。

あき 二人は会いたい人いないの。

ゆみ ・・いないね。むしろ誰とも会いたくない。

なお ここにいれば、みんなのことずっと好きでいられるもんね。

あき 高橋！

なお ・ゆみ 高橋君？

あき そう。

なお ・ゆみ うーん・・。

なお
ゆみ
なお
ゆみ
・・今頃、どうしとるんやろうかあ。
結婚しとるやろうねえ。
会うのはなんか怖いね。
でも、私、会ってみたい。

と、それぞれ思いを馳せていると。
高橋が顔を出した様子。

なお
ゆみ
・・たかはし、くん。
ご無沙汰・・元気にしてた？

間

なお
ゆみ
なお
ゆみ
なお
ゆみ
・・へえ、あ、そう、お孫さんも。
何歳？・・・3歳、つてそりゃあ、かわいいやろうねえ。
え、はしご？
ああ・・。
うん・・。
(高橋に) ここ？家みたいなものだから。
(高橋に) 昔から住んでる実家だから。
なお・ゆみ うん・・またね。

高橋君は去った様子。

あき
・・なんでっ！

なお
老けたね。

ゆみ
ハゲたね。

なお
会いたい人って、あれ？

ゆみ
会わんほうがよかったあ。

なお・ゆみ
・・はあ。(溜息)

間

ゆみ
・・実家ってさつき言ったね。

なお
うん、言った。

ゆみ
すっごい腑に落ちただけど。

なお
あ、ほんと？

ゆみ
ねえ、この空間つてもっと心地よくならんかな。

なお
広さとか？

ゆみ
うん、広さ。

なお
横に、広く。

ゆみ
お互いのプライバシーを確保できるくらい広く。

なお 一人部屋欲しいなあ。

ゆみ ・・掘る？

なお 掘っちゃおう？

なお ・ゆみ 掘ろう！

なおとゆみは、穴の横壁を掘り始める。

あき (その様子を見て) 違うよね！

なお 穴が一番。

ゆみ 望んで入った穴だもの。

あき ここはダメだって！

なお 誰もが本当は穴の中にいるもんだと思うの。

ゆみ 穴に入ろうとしないから高橋君はあんなに普通になっちゃったんだね。

あき 違うでしょ、本当は助けてもらえないのが怖いんでしょ？

なお ええっ(笑って)違うよ？

ゆみ あきは、どうして穴の中を不幸せとしか思えないんだろう。

なお それってどんな現状にも満足できない人の典型だよ。

ゆみ 穴ほど自由な場所なんて、どこにもないんだよ。

なお ん？

ゆみ どした・・。

なおとゆみは、手を止める。

根っこ。

なお だね。これ、竹じゃない？

ゆみ ここって竹藪だった？

なお 違ったよ、確か。

ゆみ 竹の根って強いんだよね。

なお どんどん横に広がって、お互い絡みあって頑丈だね。ちよつとやそつこのことじゃあ、地崩れもしないほど……。

ゆみ どおりだね。

なお 掘れない訳ですよ。

ゆみ この先に、手が、全然いかない……。

あきは、二人の目の前に立つ。

あき 違う！私が2人を助ける。みんな、ここから出よう。

と、突然、穴の中が暗くなる。

三人 わあああー。

ゆみ なんか降ってきた？

なお

わーん、なんも見えん。

灰暗い闇の中で。

声 おい、どんなんやって茹でるんか。

三人 ……。

あき (大声で) なに？

声 筍、いれとるけ、鍋に。

あき ねえ、ここよ、私、ここ！

声 どうしたんか。

あき 穴やろ、穴の中。

声 水、入れとくけ。

なお たけのこ？ たけのこ臭い！

ゆみ え、これ、たけのこ？

声 おい、水、入れるぞ！

あき 駄目ー！ ちよつと待って。

声 なんか。

あき 水はダメ。

なお 糠、ぬか！

あき ぬか！ なの！

声 あ？

あき 糠入れなきや！水はダメ、今はダメ！

声 糠は・・・ない。どうするんか。とりあえず炊くか。

あき ダメー！火もダメ。絶対ダメ。

声 どうするんか。

あき そのまま置いとつて。ね、糠、もらってきたら、私やるから、ね。

声 おお。

あき それと！蓋、あけて。

声 あ？

あき 鍋の蓋、あけて。

声がしなくなる。

あたりは、一向に暗いまま。

あき (大きな声で) ちょっと、あんた、なんしょん。

間

ゆみ ・・タン、タン、タンタンタン。

なお (ブラバンの曲を口ずさむ)

ゆみ 野球…やね。これは。

なお 甲子園。春のセンバツ…。

あき
(大声で)おーい！中継、見とる場合やないんよー。

間

なお
(ブラバンの曲を口ずさむ)

ゆみ
私ら、茹であがるんかね。

あき
いや、そんなことません。どうにかして出らな。

なお
この周りがあるやつよじ登ろ。

あき
え？これ？

ゆみ
うん、いいね。

なお
世の中で他人ほどあてにならないものはない。

ゆみ
世の中で私らほど、あてになるものもない。

薄い暗がりのなか、三人はやつと動き始めた。

蓋があき、一筋の光りが差し込む。

おわり

よくお似合いですね

作 坂井 彩

【登場人物】

かなえ（井筒屋勤務、出納係）二十四歳
のぞみ（井筒屋勤務、販売係）二十四歳

デパート。倉庫の一室。

ハンガーラックにワンピースが何着も掛けられている。

かなえとのぞみ、ワンピースを手に取り、触ったり、ひっくり返したりして検品の作業をしている。

かなえ 刺さったんよ

のぞみ どれくらい

かなえ ぶすつと

のぞみ どこに

かなえ ウエスト

のぞみ ひいゝ

かなえ あの服、相当絞っとるし、それはそれは痛かったと思うわ

のぞみ
かなえ

大事やねえ

だから他にもないか探しよるんでしょ

かなえ、針がないか探し続ける。

のぞみ
かなえ

かわいいそうにねえ

かわいいそう？ あつてはならんことよ、絶対に。

私たちは商品に信頼を担保しとるんだから。

あんたがよ、かわいいそうなのは。たまたま売った一着がさ。

かなえ
のぞみ

ちよつと、お客様がケガしたんよ。
そうやけど、

けど？

私がヘルプ頼まんかったら、

良い？悪いのは針つけっぱなしにしてた業者。わかつたら手を動かす。

あとはやつとくけん、帰らんね

この量一人で終わらせるん

待つとるんやないと

どうもならんよ、ちよつとくらい遅れたって

他の人に頼むけん

いいんよ、私がここにいたいんやけ

のぞみ
かなえ

かなえ、黙々と作業を続ける。

のぞみ、一着のワンピースを手に取る。

ワンピースをじっと見つめたまま、手を動かさない。

かなえ

いつまで経っても終わらんよ

のぞみ

これ、あんたに似合いそうやね。キレイな色。

かなえ

今年のトレンドよね

のぞみ

そうなん

かなえ

これも、それも、あつちのも、同じような色やん

のぞみ

よう見とる

かなえ

出納係と言えど、最先端のデパート勤務ですから

のぞみ

私「かわいい」とか「素敵」とかお客様と盛り上がるだけなんよねえ

かなえ

しっかりしいよ、販売員やろ

のぞみ、かなえの手を引っ張り立たせる

手にしていたワンピースをかなえにあてて、

のぞみ

まあ、素敵！

かなえ

：

のぞみ

よくお似合いですね

かなえ

：

のぞみ

…

かなえ

でも、この服って着回しがしづらいんじゃないかしら

のぞみ

そんなことはありませんよ

かなえ

この一着でどこへでもお出掛けできます！

のぞみ

…

かなえ

いかがでしょうか

かなえ、ワンピースをのぞみの手から取る。

のぞみにワンピースをあてる。

かなえ、のぞみに目配せをする。

のぞみ

でも、この服って着回しがしづらいんじゃないかしら

かなえ

そんなことはありませんよ。

ジャケットなどかちつとした羽織物をお召し頂ければフォーマルなシーンでもお使いできますし、カーディガンなどを合わせられるとまた違った雰囲気着こなすことができます。色味も今年の流行りですが、主張しすぎずいつまでも飽きの来ないテイストです。

…

のぞみ

いかがでしょうか

かなえ

買います！

かなえ

ありがとうございます。

かなえ、ワンピースをハンガーラックに戻す。
のぞみ、別のワンピースを持ってきて、かなえにあてる

まあ、素敵！

：

のぞみ よくお似合いですね〜

かなえ それしかないん？

のぞみ え

かなえ あんたの引き出しには、それしかないんかって

のぞみ だって、こう言ったら大抵のお客様は満足してくれるんやもん

かなえ そうなん

のぞみ あと、にこってしたら完璧

かなえ、ワンピースをのぞみの手から取る。

のぞみにワンピースをあてて、

かなえ お客様、どのようなシーンでのご使用をお考えですか？

のぞみ えっと〜、彼どのお出掛けで〜

かなえ そうですか、落ち着いた色味が非常にお似合いですよ

のぞみ ありがとうございます〜

かなえ
のぞみ
かなえ
お出掛けはどちらへ行かれることが多いのですか？
そうですね、最近はダンスホールに行くことが増えましたよ
では、こちらもおすすすめです

かなえ、ハンガーラックから別のワンピースを取り出し

かなえ
のぞみ
かなえ
ほの暗い雰囲気の中でも、華やかさを演出できると思いますよ
えっかわいい！迷っちゃうなあ
演出したい雰囲気で、使い分けをされてもいいと思います。
大人っぽく落ち着いた雰囲気で踊りたいときはこちらを。

華やかに楽しく踊りたいときはこちらを。
使い分けできますと、他のお出掛けでも色々な場面で違う雰囲気を演出で
きますし、2着持たれていて損はないかと思えます。

のぞみ
かなえ
のぞみ
かなえ
…
いかがでしょうか？
買います！
ありがとうございます。

かなえ、手にしているワンピースをハンガーラックに戻す。

のぞみ
初めてお見掛けするけれど、新人の方かしら

かなえ
のぞみ
かなえ
のぞみ

いえ、普段は出納係でして、表には出ないんです
あら！ 勿体ない！ もっと売り場へ出てきたらいいのに
私はただの裏方ですから

とてもお上手だわ

そんなことありません

ぜひコツをお聞きしたいものね

コツだなんてそんな、

あるんですよ、聞かせてくださいな

お客様に寄り添うことを心掛けているだけです

なかなかできることじゃなくってよ

そんな

何があなたをそうさせるのかしら

私はただ仕事が好きなだけです

：

この仕事は私の誇りですから

寂しくなるわ

え

もうじき会えなくなってしまうのね

のぞみ、ハンガーラックからワンピースを取り出す。
かなえにあてて、

のぞみ
お客様

かなえ

のぞみ

かなえ

のぞみ

たまには遊びにいらしてくださいな

私いつでもこの売り場にいますから

のぞみ、あてていたワンピースをかなえから外す。

そのワンピースを検品し始める。

かなえ、のぞみの手を止める。

のぞみ

かなえ

のぞみ

かなえ

のぞみ

かなえ

のぞみ

かなえ

ちよつと、なに、

店員さん

え？

私、服を探しているの

：

手伝ってくださいる？

：

ねえ、店員さん

のぞみ、立ち上がる。

検品していたワンピースをハンガーラックに掛ける
背筋をしゃんと伸ばす

のぞみ

どのようなお品物をお探しですか？

かなえ、立ち上がり、のぞみと向かい合う。

かなえ
のぞみ

店員さんが私に似合うと思うものを選んでください
かしこまりました

のぞみ、ハンガーラックからワンピースを一着手に取る
かなえにあてる

かなえ

どうしてこれが似合うと思ったの

のぞみ

このあとのお出掛けにぴったりです

かなえ

：

のぞみ

あなたの彼は強面ですからね、淡い色合いが雰囲気と和ませるでしょう
そう

かなえ

いかがでしょうか

かなえ

他のものは？

のぞみ、ハンガーラックにワンピースをしまう。
別の一着を手に取り、かなえにあてる。

かなえ どうしてこれを選んだの

のぞみ 今後の大切な場面で役に立つと思います。

かなえ 今後？

のぞみ 上品な色合いが好印象です。

かなえ 誰に？

のぞみ 彼のご両親に

かなえ …

のぞみ いかがでしょうか

かなえ あまりぴんとこないわ

のぞみ、ハンガーラックにワンピースをしまう。

また別の一着を手に取り、かなえにあてる。

のぞみ 綺麗な白が良く映えています

かなえ …

のぞみ 幸せになってね

かなえ、あてられていたワンピースを床に放る
のぞみ、あわててそれを拾い上げる

のぞみ
お客様？

かなえ
あなたは本当にダメな店員ね

のぞみ
申し訳ありません。

かなえ
あるでしょう。 本当に似合う服が。

のぞみ
私は、このワンピースがお似合いだと、いえ、ぜひ着て頂きたいと、
かなえ
これよ！

かなえ、自分の制服を握りしめる。

かなえ
そうやる

のぞみ
：

かなえ
私、この服が世界一大好きやし、世界一似合うと思つとる

のぞみ
：

かなえ
ねえ、言うてよ。 よくお似合いですねって。

のぞみ、かなえに背を向け、拾ったワンピースを検品し始める

かなえ
そのワンピース、絶対に針が入つとる

のぞみ
かなえ

：
間違いなかよ

のぞみ、立ち上がる。

かなえにもう一度ワンピースをあてる

のぞみ

ご安心を。このワンピースには、このワンピースだけには、絶対の信頼が担保されていますから

のぞみ、ワンピースをかなえに差し出す。

かなえ、ワンピースをのぞみから受け取る。

自分でワンピースをあてて、のぞみに見せる。

のぞみ

よくお似合いですね

かなえ、あてていたワンピースをぎゅっと抱きしめる。

おしまい

セムフのはなし

作 坂井 彩

【登場人物】

ジュン 小学生

タカシ 小学生

セムと書かれた石炭車がゆつくりと通過している。
ジュンとタカシ、セムの上に乗っている。

ジュン やめりつて言うたやん

タカシ すぐ降りるつもりやったんよ

ジュン 本当か

タカシ 店番があるけね。今日、バナナの賞味期限なんよ。

ジュン じゃあ何で乗ったんか

タカシ :

ジュン 何で乗ったんか

タカシ 乗って見たかったんよ

ジュン 降りれるもんも降りれなくなつたらうが

ジュン セムフが？
タカシ するやろ
ジュン せんよ
タカシ だっていつも手を振ってくれるやろ
ジュン 振らんよ
タカシ お前もいつも「おーい」ってしよるやん
ジュン セムフに？
タカシ そうよ
ジュン 僕が手を振るんは、国鉄マンによ
タカシ ほら、振りよるやん
ジュン え
タカシ セムフに手振っとるやん
ジュン セムフって人のことやないけね
タカシ え
ジュン 車輛の名前よ
タカシ ：
ジュン 知らんかったん
タカシ 知っとるよ
ジュン 知らんかったんやろ
タカシ 知っとるつて
ジュン 正直に言いよ

タカシ
ジュン
タカシ
ジュン

セムフに乗っとる人やけ、「セムフ」って呼んどるっちゃ
嘘つけ

本当よ、他にも呼んどる人おるけ

ふくん

お前、知つとる？ これ何を運びよるか

石炭やろ

あたりまえやん、そんなん見ればわかるし。
は？

石炭だけやないんよ、炭鉱列車が運んどるんは

石炭運ぶ列車やけ炭鉱列車っち言うんやろ

チヨコレート

え

チヨコレートよ

嘘つけ

わからないの？

なんか

微かに甘いニオイがするやろ

せんよ

石炭の下に隠してあるけね、わかりにくいんよ

なんで隠すん

子供が食べるやろ

ジュン 食べたらいいけんの

タカシ いいけんよ

ジュン こんなにあるやん

タカシ 特別製やけね。そこら辺の駄菓子屋のとは違うんよ。

ジュン そんなん誰が食べるん

タカシ :

ジュン 誰が食べるんか

タカシ 国鉄マン

ジュン ふ〜ん

タカシ 俺らみたいな庶民が食べれるわけないやん

ジュン なあ、知つとる？これがどこに行くか。

タカシ 製鉄所やろ

ジュン そう思うやん。 実は違うんよ。

タカシ どこに行くん

ジュン ブラジル

タカシ え

ジュン ブラジルよ

タカシ 嘘つけ

ジュン 本当よ、僕らこのままブラジルに行くんよ

タカシ どうやって行くんか

ジュン 製鉄所の奥にトンネルがあつて、それが地球の裏側まで続いとるんよ

タカシ　なんでそんな遠くまで行くん
ジュン　石炭持つてくるためよ
タカシ　石炭ならここにも、こんなにあるやろ
ジュン　足りんのよ、鉄をどんどん作らな
タカシ　そんなに作って何に使うん
ジュン　：
タカシ　何に使うんか
ジュン　そんな大人が考えればよか。
タカシ　ふん
ジュン　日本で一番鉄を作り続ける、これが大事なんよ。
タカシ　知つとつた？　石炭ち食べれるんよ
ジュン　は？
タカシ　石炭、食べようや
ジュン　え
タカシ　ほら、
ジュン　食べたことあるん
タカシ　うん
ジュン　嘘つけ
タカシ　本当よ
ジュン　どうやって
タカシ　口に入れたら、ぱりぱり崩れるんよ

ジュン　なんで食べようっち思ったん

タカシ　元気が出そうやろ

ジュン　え

タカシ　あんなにエネルギーを作り出しとるんよ

ジュン　うん

タカシ　食べたら元気になるに決まっとる

ジュン　なんでそんな元気になりたがるん

タカシ　親から「店立つときは明るくしろ」って言われとるけんね。

ジュン　元気がないときはこれを食べれば一発で笑顔になれるんよ。

ジュン　どんな味がするん

タカシ　食べてみたらいい

タカシ、石炭を手取る。

手で触って形を確かめる。

ニオイを嗅いでみる。

服でこすって汚れを落としてみる。

ジュン、その辺りに落ちていた石炭の欠片を口に入れる

ジュン　あははは

タカシ　どうしたん

ジュン　笑いの止まらん

タカシ 大丈夫なん

ジュン え

タカシ 急に口に入れたけど大丈夫なん

ジュン 食べたことあるんやろ

タカシ う、うん

ジュン ほら

タカシ、意を決し、石炭の欠片を口に運ぶ。

タカシ あははは

ジュン、もう一つ石炭の欠片を口に運ぶ

ジュン あははは

二人、ひとしきり笑い続ける。

ジュン なあ、知つとる？ 石炭車って普通の列車じゃないんばい

タカシ そりゃそうやろ。石炭運ぶための列車やけ。

ジュン ここだけの秘密なんやけどね

タカシ なんなん

ジュン

チヨコを隠すわけでもない、ブラジルから石炭運んでくるわけでもない、本当は地球から脱出するための乗り物なんよ

タカシ

嘘つけ

ジュン

本当よ。製鉄所の高炉が発射台になって月へ飛び立てるんて

タカシ

なんで地球から脱出するん

ジュン

：

タカシ

なんで脱出するんか

ジュン

地球ってな、時限爆弾なんよ。いつか爆発してしまいうらしい。

タカシ

それっていつなん

ジュン

わからん

タカシ

じゃどうするん

ジュン

今から逃げよう

タカシ

え

ジュン

製鉄所の人をお願いして、月に飛ばしてもらおうんよ

タカシ

でも、俺は帰らな

ジュン

なんで

タカシ

店番のあるけ

ジュン

バナナと命どっちが大事なんか

タカシ

バナナ

ジュン

そこは命やろ

タカシ

バナナにな、俺の命も、父さんの命も、母さんの命も、妹の命も乗っとるんよ

ジュン なあ、逃げよう

タカシ なんてそんな逃げたがるん

ジュン ここは息が詰まるやろ

タカシ

ジュン 一緒に行こうや

タカシ 月に行つたつてどうするん

ジュン これから決めればいい

タカシ これから

ジュン そうよ、地球のことは決まり切つとるやん。でも、月のことはまだまだ手

つかずやろ。だから、これから、全部自分たちで決めれるんよ。

タカシ …なあ、月にも石炭あるやろうか

ジュン 石炭はあるかわからんけど、石はその辺に落ちとるんやないん

タカシ 月の石つてどんな味がするんやろ

二人 確かめたいなあ

二人、カバンを列車の外に投げ捨てる。

するとその方向から声が聞こえる。

声 セムフー

ジュン なんか言った？

タカシ え

声 セムフー
ジュン なんか聞こえる
声 セムフー
ジュン セムフって言いよる
タカシ ほら言ったやろ、俺以外にも呼んどる人のおるんよ

二人、声のする方向に思い切り手を振る
列車は二人を乗せゆつくりと進んでいく。
まばゆい光が二人を包む。

嘘つきが私の始まり

作 寺田剛史

【登場人物】

社長 野村証券社長

稲垣 野村証券門司支店従業員

女 事務の女

会議室

30代後半の男と、稲垣がいる

稲垣

これ、母が飛行機乗る前にほいっち出すんですよ、5個。お腹が空いたら食べっちゅってから。(包みを出して)こんなの社長さんに失礼やろって言ったんですよ、そしたらバカ、あんたが食べるんやろうもって、私つきり母が社長さんにおみやげで持って行けって言うてるのかと思って。よかったですらどうぞ。

稲垣はゆで卵1つ社長の机の上に置く

社長

私に？

稲垣

どうぞよかったです。わたしはもう食べてしまいましたので。

社長

そうですか。

稲垣

あまりもんみたいですみません。社長さんとお話するのにお腹がなったら

失礼だと思って慌ててそこで食べてしもて。

社長

4個も。

稲垣

はい、あ、どうぞ召し上がって下さい。

社長

ではお母様も一緒に？

稲垣

はい、いま東京の街をぶらぶらしています。

社長

そうですか。

稲垣

どうぞ食べて下さい。

社長

え。

稲垣

卵。

社長

ありがとうございます、でも私は人に物をもらわないようにしていますので

稲垣

お気持ちだけで。

社長

そうですか、なんだか失礼な事してしまいましたか

稲垣

してませんよ、お気になさらず。

社長

そうですか。それで、私どうして呼ばれたんでしょう。

稲垣

本日稲垣さんにお越し頂いたのはですね、門司支店での営業成績について

社長

お話を聞きたくてですね。

稲垣

営業成績。

社長

ですからね、どうやってお客様にオススメすれば全国5番目に入る営業成績になるのかなど、それをお聞きして、今後の我が社の糧に出来たらなと思つてですね。

稲垣

糧だなんて、私なんておにぎり2つで育った人間ですから、誰かの糧になるとかそんな参考にされるような人間じゃありませんよ。

社長

でも皆が望んでる成績を結果として叩き出してるわけですから。何か作戦というか、方法論のような物がありますよね。

稲垣

無いんです。

社長

無い？いや無い訳無いんです。

稲垣

でも無いですねえ。

社長

支店の成績に関わるので隠してらっしゃるといふことですね。

稲垣

隠す？

社長

支店長にその話はするなと言われた？

稲垣

いいえ、だからですね、

社長

嘘つきではないとのことですが、実は既に嘘をついている。

稲垣

ついてません。

社長

ここは一つ隠さずにお話して頂けませんか。

稲垣

だからついてません。本当に私は東大出の支店長の言われたとおりに売っただけで

社長

東大出の支店長の言われたとおりに売れば皆がこんな成績になる訳がないんですよ、だったらここに来てもらうのはその支店長という事になるんです。

稲垣 支店長は忙しいですから東京まで来れるかどうか。

社長 いや、そう言う事ではなくて。

稲垣 私と母がここに来たつてなんの糧にもなりませんし、私は何しに行くのか

な？つて思いましたよ来ながら、でも母も東京行つてみたいつて言うし、

私と母が来て社長さんが得する事といえ、卵一個貰えるくらいですかね。

社長 貰つてはいませんけどね。

稲垣 貰つて下さいよ。

社長 いえ、タダより高い買い物は無いですから。

稲垣 そんな、卵を1つあげたからと言つてお給料上げて下さいなんて言ひませ

んよ。

上がりませんよお給料は。

言つてません。

はい。

稲垣 私みたいなおにぎり二つで生きて来た貧乏人間なんかより、東大を出てる

支店長の方が、

社長 いや、東大出の支店長、東大出の支店長つて東大だからいいという訳では

ないですから。わたしが聞きたいのは、稲垣さんが、どうして、どうやつ

てこの営業成績をです。

だから、支店長の言うとおりに売つたら、

稲垣 その支店長の言うとおりに売つただけでこの成績ならうちの会社はその支

店長が沢山いればいって事になつてしまいますし。

稲垣 支店長が沢山いると支店長が助かりますね。

社長 は？

稲垣 まず社長さんが支店長を雇っているのだから社長さんが居ないと始まりま

せんし。だからほらこう言うことですよ、社長さんが支店長を雇ったとい

うことそこが優秀。

社長 私が優秀・・・。

稲垣 だってそうでしょ？

社長 はあ。

稲垣 そうですよ。

社長 まあ、それはありがとうございます。

稲垣 支店長の言われた通りに売った結果が優秀なのだから支店長が優秀、そし

てその支店長を雇った社長さんが優秀。私が優秀だしたらそれは私を育

てた母が優秀。私自身が最初から優秀だった訳じゃないですし。

なるほど、自分だけではその成績は出せなかったとそういうことですね。

稲垣 支店長と母のおかげです。

社長 もしくは私のおかげだと。

稲垣 おにぎり二つで育った貧乏家族ですよ、優秀な訳が無い。

社長 そのおにぎり2つで育った話でなくてですね、

でもどうやって売ってますかと聞かれてもこれといって何も無いですし、

稲垣 東大出の支店長が
分りました、分りました。東大出の支店長はもう分りました。

稲垣 社長 はい。なのでお話できる事と言ったら私の貧乏話くらいしか。
社長 んー困った。もっと具体的なお話をお聞きしたかったのですが。

稲垣 社長 では私はもう必要ありませんか？

社長 はい。待つてください。折角来て頂いたのですし、

稲垣 社長 では私の貧乏話でも聞きますか？

社長 まあ聞いてもしようがないとは思いますが一応聞きますか。

稲垣 社長 一応……。

社長 聞かせて下さい。

稲垣 社長 はい。えっと、私、母に似たのかおしゃべりで。ぺらぺら沢山しゃべって
すみません。

社長 いえ大丈夫です。聞かせて下さい。

稲垣 社長 はい。父が戦争に行つて母と弟と三人暮らしになったんです。貧しかった
んです。母の職場は水上警察署のお掃除のお仕事だったんで、そこでもら
うお昼ご飯のおにぎり2つが家族三人の一日のご飯なんです。あつわたし
弟もいて。だから3人で2つ。一個足りない。

社長 なんですかそれは1人一個欲しいでしょ。

稲垣 社長 そうなんですでも2つしか貰えないからそれを全部鍋に入れて、アカザ
の葉っぱなんかを混ぜ合わせておかゆにして皆で食べるんですけど。その
お昼を貰いに行くと、町内会長さんなのかな？、男の人が最近どうです
かあつて話しかけてきて母と話を始めたんです、その間、私と弟はおに
ぎりを持つてじつと待つてるんですけど、ひよっと目を離れた隙に弟がお

社長

稲垣

にぎりと一緒にいなくなつて。あれーどこ行つたかなくて思つたら離れたところからひよこひよこ歩いて来て、どこ行つたのって近寄ると、あれ？持つてるはずのおにぎりを持っていない。「あんたおにぎりは？」って聞いたなら知らないって言うんです、口の周りにご飯粒付けて、僕おにぎりのこととか知らないよって言うんです。

食べちゃったんですか？

母がちよつと立ち話してる隙に、そつとおにぎり持ち出して、こつそり食べて、「食べたの？」って聞くと食べてないって嘘つくんです。

社長

稲垣

それはお母様がしつかり見張つていないといけませんでしたね。まあそうですね。

社長

稲垣

食べたのなら正直に言うべきです。

3才です

社長

稲垣

・・・3つ子の魂100までです。

社長

稲垣

厳しいですね。

自覚はあります。

そのおにぎり2つが今日1日の家族のご飯なんです。それがないと私も母も今日何も食べる物が無いんです。これは母にこつぴどく怒られるぞつて言うのと、食べる物が無いって言うのとで私も泣いてしまつて。でも母は怒りませんでしたね。どこかに落としたんかな？転げて行つて穴に落ちてネズミがちゅうちゅう大喜びやねつて。

社長

うそは良くない。そう言う優しさは大きくなつてその子の為にならない。

稲垣 違うんです。

社長 違う？

稲垣 違うんです。おにぎりが無くなって私が泣いてるのと弟もいけない事を

してしまっただって分ったんでしょね、泣いてて、そしたら町内会長さんが、この町内に新人さんが入って来たみたいですねって嘘ついて、新しくおにぎりを2つくれたんです。

社長 嘘つきばかりですね。

稲垣 違うんです。

社長 また？

稲垣 嘘つきどころじゃないんです。

社長 何がですか？

稲垣 数日かたって母の仕事場に行ったら、大人たちがワイワイ騒いでて、どう

やら町内会長さんが捕まっただって。

捕まっただって？どうして？

みんなのご飯を持って逃げたんですって。

え？

さらに、私が町内会長さんだと思っていた人、実は違ってた。

え？

夫婦で引越してきて、すごく気さくでいいご夫婦だなんて言われてたみたいなんですけど、みんなのご飯と一緒にいなくなつて、大騒ぎになつて、母に何が盗まれたのかって聞いたら、何も盗まれてない、あんたたち

が盗まれんでよかったつて。私、泥棒におにぎり恵んでもらったんだなつて。いいことなのか悪いことなのか、本当は穴、空いてたんじゃないかとか。穴からねずみが恩返ししに来たのかとか思つて。

社長

ねずみじゃないと思ひますが。

稲垣

私、この事だけは忘れられなくて。

社長

(ゆで卵を指して) 食べますか？

稲垣

結構です。どうぞ食べてください。

社長

いやわたしは。

稲垣

どうぞ食べて下さい。

社長

人からモノは頂けない。

稲垣

でしたね。あれ何の話でしたっけ？あ、おにぎりの話でしたね。

社長

違います。稲垣さんがどうやってその業績をあげたのかの話から。

稲垣

だからそれは東大出の支店長が、

社長

はい、それはもうなんども。

稲垣

そうですね、でも秘策なんてないし、結局社長さんが必要なモノがお話で

きなくすみません。

社長

いえ、私も少し求める物が違った気がしてます。

稲垣

(ゆで卵を指して) 食べますか？

社長

そうですね、いただきますでしょうか。

稲垣

いただいでくれるんですか？

社長

いただいでみます。

稲垣
じゃあよかったらこれ皆さんで。

稲垣はゆで卵を4つ出す。

社長
え。

稲垣
どうぞ。

社長
まだ4個も？

稲垣
ええ、まだ4個も

社長
いったいいくつ持ってきたんですか。

稲垣
5個ですよ。

社長
全部で？

稲垣
はい全部で5個、母に持たされて。

社長
でも食べたって。

稲垣
あらそんなこと言いましたか？

社長
稲垣さん、あなた。

稲垣
はい。

社長
あなた、とんだ大嘘付きですね。

稲垣
母に似たんですねきつと。

社長はゆで卵の殻をむいて食べた。

終わり

それでも私は許さない

作 寺田剛史

【登場人物】

渡部 運転士

佐竹 渡部の先輩

寮長 渡部、佐竹の住む寮の寮長

車内には運転士と佐竹、二人が住む寮の寮長がいる。

渡部 どうなりました？

寮長 あの後親御さんが迎えに来て払って行ったよ。

渡部 そうですか。すみません何話してるか分らなかったし、ちよつと僕じゃ手に追えないっていうか。

寮長 私も何話してるか分らなかったから電話したんよ家に、そしたら迎えに行きますってことで。

渡部 そうでしたか。

佐竹 お前、電車で話した時どんなんやった？

渡部 どんな？進行中に急に話しかけてきてから。

佐竹　　なんて？

渡部　　なんて言うか、紙切れ渡されて、お金がない、降ります、あとなんか
もごもご言つとつて。

佐竹　　それだけ？

渡部　　はい、他のお客さんもおつたし、次で降りたいみたいやったから住所と電
話番号書いてある紙だけ貰つて。

佐竹　　で今日の朝か。

渡部　　そうですね。一応今日中に連絡しようと思つとつたけど、朝営業所に来
とつたみたいでそのまま寮まで。

佐竹　　そんで？

渡部　　それでお前に女が会いに来とるぞとか言うから降りて行つたらおつて、運
賃払いに来たんですわねって聞いたらまたお金持つてないって言うし、なん
か様子が変で、またなん言つとるか分らんくて、で、もう出社せんと行け
んかったから寮長さんをお願いして話聞いてもらつて。

寮長　　私も最初何の事だか分らんで、運賃払いに来たのかなんのかって渡部君
に言われて、それで話聞いたけど、ほんとなん言いよるか分らんくてね。

渡部　　で私も連絡先の書いた紙渡されて。

寮長　　あ、それで連絡できたんですわね。

渡部　　そお、でね。

渡部　　連絡先の紙渡せば良かったつてあとで思つて、良かった。

佐竹　　それでご両親が迎えに来たと。

寮長　　そお。でね。

渡部　　頭がオカシイ人なんかな。

寮長　　やめて。

渡部　　え？

寮長　　頭がおかしいとかやないから。

佐竹　　そおなん？

寮長　　そうよ。

佐竹　　でもなん言いよるか分らんのやろ？

寮長　　そうやけど頭おかしいとかさうゆう言い方やめりつて。

佐竹　　俺なんか悪い事言つた？

寮長　　いや違うんよ。あんね、まったく訳が分からん事を言いよるつて感じやな

くて、なん言いよるか聞き取れないつて感じで。やけそれでね。

佐竹　　ずっと頭下げとつたんでしょ？

寮長　　ん？うんそう、謝つてるのか何なのか、頭べこぺこさせてて、

佐竹　　名前は？

寮長　　名前聞いて、答えはしとるんやけどそれもなんて言いよるか分らん。

佐竹　　んー。

寮長　　でね、ご両親が来て母親がその子を連れて帰つたん。

渡部　　お父さんは？

寮長　　私、引き止めて聞いたんよ。

佐竹　　え、どんな見た目？

寮長 ん？んー恐い感じのお父さん。

佐竹 いやその子。

寮長 え？

佐竹 その子はどんな？

寮長 ああ、その子？

佐竹 どんな感じなの？

寮長 どんな感じって。

佐竹 どんな？可愛い？

寮長 ・・・。

佐竹 え？可愛いなの？

寮長 ・・・。

佐竹 ん？

寮長 ・・・。

佐竹 え、そんなに可愛いん？でも頭おかしんじゃないな。え？どんな感じで話す

ん？話聞いとるだけじゃ結局どんな雰囲気か分らんからさ。

渡部 おとうさんはなんて？

佐竹 いやおとうさんじゃなくてその子。

渡部 いや先輩、寮長さんお父さんに聞いたんですって。

佐竹 何を？

渡部 その子の事。

佐竹 え、聞いたの？なんて？

寮長

だからさつきから話そうとしとるでしょ。

佐竹

えなんて？

寮長

だからさつきから話そうとしとるでしょうが。

渡部

・・・おとうさんはなんて？

寮長

・・・3ヶ月前くらいか銃声が聞こえた夜あったやろ。

佐竹

え、知らない。

渡部

そんな事ありました？

寮長

私も話聞くまでそんな事あったかな？って思いだせんかったけど。

佐竹

それが？

寮長

何の騒ぎにもならんかったから分らんかったけどその話聞いてあつて思つて。

渡部

ああ、ポンポン菓子や。

佐竹

は？

渡部

こんな夜にポンポン菓子作つてどうすんやろつて思った、そう言えば。

佐竹

銃声か、それで？

渡部

それで食べたいなつて。

佐竹

お前じゃなくて

渡部

ああ。

佐竹

その銃声が？

寮長

それでね、ジヨウノキャンプあるやろ、補給基地。

佐竹

あるね、あれ補給基地なんや。

寮長

そこから米兵が脱走したんで。

渡部 え？そうなんですか？

佐竹 知らないな。

寮長 お父さんの話だと脱走したのはアフリカ系アメリカ人で相当な人数で集団脱走したらしいん。

佐竹 え、今も脱走中！？

寮長 いや、今は大丈夫やろ。

佐竹 それほんと？まだその辺潜伏してるんやないの？

寮長 やったらもつと大騒ぎになつとるでしょ？

佐竹 そやけど、その事自体騒ぎになつてないんやから、知らない所で実はみた

寮長 いな事もあるかもやろ？

寮長 私に言われても分らんよ。

渡部 その脱走事件とその子となんか関係あるんですか？

佐竹 それよ。

寮長 おとうさんが話してくれたんは、そゆ脱走があつたつてことだけで、うん、だけ

佐竹 え、なん聞いたん？その子の事聞いたんよね？

寮長 お父さんが言うには、数名ずつに分かれて繁華街や周辺民家に侵入して、破壊、略奪、傷害、強姦、繰り返して、

佐竹 そんな話まったく耳にも入つてこんかつたな、それほんと？

渡部 で？

寮長 それで、ウチも被害に遭いましたつて。

佐竹 何の？なんか盗まれた？

寮長 分らん。

佐竹 は？

渡部 何の被害かは聞かんかったんですね？

寮長 うん。

佐竹 聞かんかったん？何の被害か。

寮長 聞けんかった。

佐竹 なんで？

寮長 なんで？

佐竹 え、なんで？聞けばいいやろ。

寮長 聞いて、もしかしてそうやったらどうするんね。

佐竹 もしかしてって？

寮長 女の子よ。

佐竹 うん、え？

寮長 だからもしかしてって頭をよぎるやろ。

佐竹 何を？

渡部 先輩。

佐竹 なん。

寮長 何の被害か自分から言わんかったって事はそう言う事かもって思うやろ！

佐竹 その子が！

佐竹 あーなるほど、そう言う事か。

渡部 待つて下さい、でもそれは分らん事ですよ。

寮長 うん。

渡部 それは誰にも分らん事やから。

佐竹 でもそうかもって思ったやろ

渡部 思つてないです

佐竹 なんかそれ、思ったやろ。

渡部 やけそれは決めつけたらいけんでしょって。

佐竹 決めつけてはないやろ、二人がそうなのかもって思ったんやろ？

渡部 頭をよぎっただけで、違うと思つてます。

佐竹 待てや、俺だけ悪いみたいに言うなや。え？俺なんか悪いんか？

渡部 はい。

佐竹 はい？はい？？俺のなんが悪いんか？

渡部 冗談半分でそんなこと言わんでください。

佐竹 冗談半分つで言つてねーよ。

渡部 なるほどなつて笑つとつたでしよ今。

佐竹 笑つてねーよ。なんなんかお前、なんで俺が攻められるんかちや。

渡部 せめてないでしよ別に。

佐竹 人の不幸を笑つて楽しいですか？みたいに聞こえるやろがその言い方は。

寮長 まつてまつて、なんであんたらがケンカしよんね。

佐竹 ケンカやねーよ。

寮長 でも違うの、

佐竹

なんが？

寮長

可哀想って言ったの。

佐竹

え？

寮長

その脱走兵達の事を、お父さん、可哀想やって。私たちのかってな妄想が

寮長

例えばそうやったとしてね、やとしたらそんな可哀想なんて事言える？

渡部

ほら、だから違うんですよ被害が。

佐竹

なんが可愛そうなん？そのキャンプに捕まっとった訳やないやろ？。

寮長

そのアフリカ系アメリカ人達は、岐阜から移送されて来てて、近いうちに

佐竹

戦地に行く事になっとつたらしい。

寮長

戦争に行く事が可哀想って事か。

寮長

違う。

佐竹

じゃ何が可哀想なんよ。そんな暴行、略奪、強姦ってやっというてそんな奴

寮長

らの何が可哀想なん。

寮長

戦地の最前線で。

佐竹

で？

寮長

最前線で戦う事が決まっとつたんって。

佐竹

どうこと？

寮長

戦地から帰ってくる死体の三分の二は黒人で、残りの三分の一が白人だって。

佐竹

それが嫌で逃げたんか。

渡部

それもお父さんが？

寮長

うん。

佐竹

逃げたんか。

寮長

死ぬ事が分ってて？ 恐くて？

渡部

それで可哀想。

寮長

たぶん。

佐竹

でもよくそんな事まで話してくれたな、自分の娘がそんな事になって、嫌や

る普通。

渡部

だから、なんでそつちに考えるんですか。嫌じゃなかったんやないですか？

佐竹

話すの、だからその子がそう言う事になったって事がまず違うんですよ。

渡部

でもそれ根拠ないやろが。

佐竹

先輩だつて何の根拠も無いでしょ。

渡部

だけど、もう話聞くとそうやろ、その子の様子もそんなだし。

佐竹

違う！

渡部

なんかちやお前、なんでそんなに怒るかっちゃ、自分の家族でもねーくせに。

佐竹

は？ 家族とか家族やないとかそんな事やないでしょ、なんなんそれ。

渡部

他人事やろつて結局、お前のそゆのな、偽善つて言うんたい、金払わず

佐竹

に電車おろしたのもそやろ、お前のそゆ偽善が、こんなことになつとんや

渡部

ろーがつて。

佐竹

は？ こんなこと？ それどんな事ですか、僕が何かしたんですか、困った人

渡部

を助けた、それだけ、それがなんか悪いんですか？

佐竹

誰でも困った人助けたいなら、その脱走したアメリカ兵も助けるよ。お前が代

渡部

わりに行つてこいや、最前線で戦つてこいや。行けるんか？ できるんかちや？

渡部 佐竹

出来る分けないでしょ、ていうかおれ日本人やし、
・・・日本人やからなんか、日本人やからなんかって！日本人は争いごと
はしませんか？平和主義ですからか？ひとを助ける人種ですからか？バカ
かお前は。

渡部

そんなこと言つたらんでしょ、僕はそうなんです、僕はそうしたんです、
そうしたいと思つたんです、そう思いたいんです、それがなんか悪いんで
すか？そのどこが悪いんですか。

佐竹

見えてない所だけきつと大丈夫とか都合がいいことばっか言つて逃げとる
んやねーぞ。

渡部

根拠ないでしょって！だから！噂でしょって！

佐竹

だから噂をいのように考えてないでどっちもみるよ、別にその子を助けた
いとか好奇心からでもいいよ、でも起きた事は一つやぞ、それをいように
に作り話にすんな。

寮長

やめなさい、あんた達が言い争つてどうするんね。そんな小さい争いが大
きい争いになるんやろーも。

佐竹

何が日本人ですからか。

渡部

なんなんかそれ。くそが、帰る。月世界寄つてくわ。じゃな。
・・・。

佐竹居なくなる。

寮長

・・・はい運賃。

渡部は運賃を受け取り

渡部

ありがとうございます。

寮長

ま、運賃払ってもらえたしよしという事で。帰ろ。

渡部

じゃ電車閉めますね。

寮長

うん。

渡部

(作業しながら)なん話とったんやろ。

寮長

ん？

渡部

一生懸命。聞き取れん事。何話とったんやろ。

寮長

わからんね。

渡部

そうですね。

寮長

お父さんね。

渡部

はい、

寮長

帰り際に、

渡部

・・・。

寮長

・・・それでも私は許さないうて。

終わり。

はなみのはなし

作 山口大器

【登場人物】

シュン 少年。

マサヒロ シュンの父親

ウメ シュンの母親

ヒロコ シュンの妹。

トシオ 職人さん。

石田 果物屋の息子、シュンの友達。

折尾公園。

花見をする客であふれている。

シュンはウメ、ヒロコと共に桜の下に居る。

シュンは絵を描きながら、花見を眺めている。

シュン

桜、桜、満開。炭鉱夫さん。地面に潜って、石炭を掘る人。地上に戻って
きたら真っ黒になってお風呂に入る。米兵さん。芦屋基地にいる。ときど

き遊んでくれる。逆立ちさせる。何言つとるかは、わからん。

ウメ シュン、書けたね。

シュン うん、もうちよつと。

ヒロコ これ何ー？

シュン これは、そこの吊り橋たい。

ヒロコ あれー？

シュン そう。

ヒロコ これは？

シュン あそこの池たい。

ヒロコ ヒロコもかく。

ウメ ヒロコは書かんでいいと。

ヒロコ なんで。

ウメ にいちゃんがしよるんやろ。

シュン あ、チヨウ。

シュンはチヨウを捕まえる。

シュン モンシロチヨウや。

ヒロコ チヨウチヨ。

ウメ 変なの捕まえんとつて。

シュン 変なのやないよ、モンシロチヨウよ。見てん、ヒロコ、チヨウチヨよ。

ヒロコ うん。

シユン 最初は青虫でな、寒い間はサナギでまっとつたんよ。

ヒロコ サナギ？

シユン そう、で、寒い冬を乗り越えて、春になると、チョウになるんよ。

ヒロコ 寒いのは嫌やけねえ。

シユン うん。そうよ。昆虫記にのっとつた。

ウメ ほら、逃がしちやり。

シユン うん。もうちよつと。

ウメ あんまりするとかわいそうやろ。

ヒロコ かわいそう。

シユン うん。

シユンはチョウを離さない。

と、向こうの人だから「おお、」という声上がる。

その方に興味が移るシユン。

シユン なんかないよる。

ウメ なんやろ。

と、チョウが逃げる。

シユン あ、逃げた。

ウメ 逃しとき。

シユン うん。ねえ、あれ、何がありよるん。

ウメ なんやろね。

シユン ねえ、ねえ。ちよつと見てきてもいい？

ウメ いかんでいいよ。

シユン 気になるやん。

ウメ 気にならんでいいと。ほら、途中でやめたら先生に怒られるよ。

シユン 書けた。

ウメ もうちよつとつて言いよつたやんね。

シユン すっげ、みんな集まつとる

ウメ シユン。

シユン ちよつとだけ、ちよつとだけ。

ヒロコ ヒロコ書いていい？

ウメ ヒロコ書かんでいいと。

ヒロコ なんで？

ウメ にいちゃんのやけんよ。

ヒロコ いいなあ

シユン 父ちゃんもあそこおるんやか。

ウメ うそ、おる？

シユン 分かんけど。
ウメ もう、放つたらかしてから。
シユン トシオさんといっしょにおるかも知らん。
ウメ 知らんよ。
シユン ちよつと、探してくるね。
ウメ あんたは行かんていと。
シユン えー
ウメ 迷子なるかもしらんやろ。
シユン ならんよ。場所わかるもん。
ウメ それでも。
シユン いいやんね、
ウメ 大人の人のもんやけん
シユン おれももう大人やけ。
ウメ あんたはまだ子供。
シユン えー、
ウメ 危ないだよ。
シユン 向こうで何があるか知つとるん？
ウメ 知つとるよ。
シユン 何？何？
ウメ ……それは教えられん。
シユン ……なんやろ、

ヒロコ なんやろねー。

シユン 危ないもの……人食い昆虫とかやろか。

ウメ なんねそれ。

シユン 昆虫記にも載つとらん、新種の、危険な虫。

ヒロコ きゃー

シユン 怖かろうが。

ヒロコ 怖い。

ウメ ヒロコいじめんといて。

シユン いじめてないよ。ヒロコ、大丈夫やけな。にいちゃんが退治してきちゃ

ウメ る。行ってくる。

シユン いかんでいいちゃ。

シユン えー、なんで、なんで。

と、人だかりがまた「おお、」と声を上げる。

ヒロコ またなんか言いよる。

シユン なんね、怖くなさそうや。

ウメ そうかね。

シユン 危なくなさそうよ。ちよつとだけ、見てきたい

ウメ 行かんでいいって、ほら、絵ば完成させんと。

シユン あっちの絵描いてくるけ。

ウメ あんた今そこで書いてったやつまだ終わっとらんやろ。

シユン 終わった。

ウメ 見せてみんね。

シユン だめ。

ウメ なんでね。

シユン なんやろ、あんなに集まって。

ヒロコ 楽しいことよ。

シユン そうやな……紙芝居かね。

ヒロコ 紙芝居！

シユン なあ、絶対そうや！

ヒロコ 水あめ！

シユン な、紙芝居ならいいやろ、5円ちようだい、

ヒロコ ヒロコも。

ウメ だめよ、だめ。

シユン なんでよ。

ウメ ……お金持っとらんもん。

シユン 入園料払ったやんね。

ウメ それでなくなつたと。

シユン 嘘や。

ウメ 嘘やない。

シユン いつつもくれるんに、いいやんね。

ウメ 今日はだめ。

シユン なんて。

ウメ お花見やけ。

シユン 誰も桜見とらんやん。みんなお酒飲んでご飯食べとるだけやん

ウメ それがお花見よ。いいんよ、それで。

シユン じゃあ、あれも、お花見なん？

ウメ そうかも知らん。

シユン じゃあ、お花見見てくるけ5円ちようだい。

ウメ やれん。

ヒロコ 紙芝居見れんの？

ウメ 今日は見れんのよ。

シユン もう、何があつとるか気になる。

ウメ あんたも、いいやないね。

と、石田くんがやってくる。

石田 シユン、来とつたんか。

シユン ああ、石田くん。

石田 あ、おばさんこんにちは。

ウメ こんにちは。

石田 シユン、見たか、あれ。

シュン

あれっち？

石田

あれよ、あれ。あの人だから。

シュン

見てない。

石田

まあ、お前お子ちゃまやからな。

シュン

そんなことないし。

石田

そんな言うなら見に行けばいいんに。

シュン

母ちゃんがダメって言うんよ。

石田

すごかったよあれ、

シュン

あれ、何やったん。

石田

あれな、

と、ウメが咳払いする。

石田

……いいもんよ。

シュン

もったいぶるな。

石田

まあ、お前には早いね。

シュン

同じ年やろが。

石田

いや、うちは青果店やから。畳屋には早いと。

シュン

わけわからんわ。果物屋さんの方がガキっぽいやないか。

石田

そんなことねえちゃ。

シュン

こっちは畳屋ぞ。渋かろうが。

石田 関係ねえちゃ。

シユン 言い出したのそっちゃろ。

ウメ わけわからんことで喧嘩せん。シユン、石田くんとこ馬鹿にしちやいかんやろ。

シユン はい。

ウメ 石田くんも、畳屋馬鹿にしちやいかんけね。

石田 すんません。

ウメ みんな一所懸命やつとるお店なんやから。2人ともお父さんが頑張つとるやろ。

シユン うん。

と、そこにベロベロに酔った父親マサヒロがトシオに連れられてやつてくる。

トシオ ちよっとしっかりしてください。

マサヒロ 大丈夫、大丈夫ちゃ。1人で歩ける。

トシオ フラフラやないですか。

マサヒロ フラフラなわけあるか。

トシオ はい、着きましたよ。

ウメ もう、完全に出来上がってから。トシオさん悪いね。

トシオ いいんですよ。もう、あっち行ってからいろんな人にお酒もらって。

ウメ ほら、ちゃんとして。

マサヒロ ん。

ヒロコ 父ちゃんお酒くさい。

ウメ ほら、ヒロコがお酒くさいっち。

マサヒロ 誰が酒臭いかくお、石田くん、来とったとね。

石田 あ、はい。

マサヒロ お父さんは、来とるとね。

石田 ああ、はい。

マサヒロ そうか。ちゃんと、お父さんのこと支えないかんとぞ。

石田 はい。

ウメ 何言つとるとですか。

マサヒロ 大事なこと教えよん。

シュン トシオさん、あっち、なんがありよると？

トシオ あっち？

シュン あの人だから。

トシオ ああ、あっち、あれね、あれは……シュンくんにはまだ早いかな。

シュン ええ、何で。

トシオ なんてっち。

マサヒロ なんや、シュン、向こうが気になるんか。

シュン うん。

マサヒロ んー、大人になったら分かる。

シュン なんそれ。

マサヒロ お前はまだ子供やけな、知らんことがたくさんあるったい。

シュン 今知りたいー

マサヒロ いや、お前にはまだ早い。

シュン えー

マサヒロ さ、飲もうかね。

ウメ まだ飲むとですか。

マサヒロ 当たり前やろ。トシオくん、こっち来たらね、花見はこうやけね、覚えとき。

トシオ はあ。

マサヒロ いつもは、生きるために、一所懸命働く。そして、花見の時は、一所懸命騒ぐ、これが、大事やけ。

トシオ はい。

ウメ お酒はほどほどにしといてくださいよ。

マサヒロ 話聞いとらんのか。

トシオ まあ、まあ、いいやないですか。

石田 これ、絵かいとるん。

シュン うん。絵画教室で習いよるけ。

石田 へえ、うまいな。

シュン うるせえちゃ。何やったんやろうな。

石田 いずれわかる。

シュン なんてお前は上からなんか。

石田 おれは知つとる人間やけ。

シユン いいなあ。

ウメ ほら、シユン、それ書いてしまわんね。

シユン はーい。

ウメ 石田くんも、ちよつとご飯食べてくね。

石田 いただきまーす。

シユン 桜、桜。人がおおい。書ききらん。

ウメ ほら、頑張つて。

と、人だかりが太鼓を叩きながら踊り出す。

石田 お、踊つとる。

シユン 楽しそうやな〜

石田 みんな踊りよる。

シユン あれ、書こ。

石田 え、太鼓もう少し大きいよ。

シユン 今書きよるん。

石田 でね、みんなもつと笑つとる。

シユン やけ今書きよるつて。

ヒロコ あ、チヨウチヨ。

トシオ お、ヒロコちゃんチヨウチヨ好きね。

ウメ

春やね。

おわり

松の皮を削る話

作 山口大器

【登場人物】

シゲ

トシ

シユン

先生

小学五年生。高塔山の頂上で松の皮を削っている。

松林。3人の少年がいる。

シゲはぼーっと空を見上げている。

トシとシユンは松の皮に傷をつけている。シユンは少し離れたところにいる。

シゲ 雲。

トシ うん。

シゲ すごいなー。

トシ うん。

シゲ 真っ暗や。

トシ
うん。

シゲ
煙突からもすごい煙や。

トシ
うん。お前も手エうごかせよ。

シゲ
うん。昨日の空襲で色々燃えたけんかなあ。

トシ
うん。ほら、シゲ。

シゲ
ん？

トシ
先生に叱られるぞ。

シゲ
うん。

シゲは渋々手を動かす。

シゲ

お前もかわいそうやなあ。

トシ

松はそんなん思わんよ。

シゲ

そんなん、わからんやろう。

トシ

わかるよ、松が痛いつて言いよるの聞いたことあるか。

シゲ

ない。

トシ

そうやろ。

シゲ

それでも、言わんでも悲しんどることあるやろ。

トシ

知らん。

シゲ

ああ、痛い、痛い、痛いですー。

トシ

うるさい。

シゲ

へいへい。

トシとシゲは松の皮を削る。

シゲ

なあ、今朝もB29が来たつち、本当？

トシ

見たん？

シゲ

見とらんけど。

トシ

おれも見とらん。

シゲ

そりゃ、そうよ。こんな雲やけ、見えんけど。

トシ

誰が言いよつたと。

シゲ

兄ちゃん。

トシ

ああ、カタワの。

シゲ

でね、何もせんで帰ったつち。

トシ

昨日も空襲来たんに。

シゲ

うん

トシ

もう無理や。

シゲ

……夏休みなんにな。

トシ

うん。

シゲ

海水浴、行きたいな。

トシ

いけんよ。戦争やけ。

シゲ

そうやけど。

シュンが2人の近くにやってくる。バケツのようなものに松の皮が
たっぷり入っている。

シゲ

海でな、一番遠くまで泳げたやつがえらいんよ。

シュン

お前が海なんぞ行ったら、サメに足食いちぎられるぞ。

シゲ

そんなことねえちゃ。

シュン

お前はいつも甘えとるけ、サメから逃げられん。

シゲ

そんなこと言うやつが食われるとぞ。

シュン

俺は強いけ、サメも倒しちやる。

シゲ

そんなん、できるんかね。

シュン

お前は兄ちゃんと同じでカタワになるんよ。

トシ

喧嘩すんなちゃ。

シュン

喧嘩やねえちゃ。

シゲ

関係ねえやろ。

シュン

支那で片手失ってノコノコ帰ってきやがってから。

シゲ

なんが言いたいんか。

シュン

お前も弱虫なんやろ、ソ連が参戦してビビつとるんや

シゲ

別に、そんなことねえちゃ。

シュン

どうだか

トシ

やめろちゃ、2人とも

シゲ 俺は何もしてねえ

トシ 黙って削れ。

シゲ ふん。

シユン 俺は、もうこんだけ削ったけね。

シゲ ふん、そんなに威張って。

シユン シゲがサボっとりましたっち、先生に言っちやる。

シゲ やめろちゃ

トシ やりゃいいやろ、シゲ。

シゲ 俺はサボってねえけな。

シゲは松の皮を削る。

シユン しっかり削るんぞ。

と、シユンはまた別のところに移ろうとする。

シゲ こんなんで、本当に勝てると思っとなるんかね。

シユン は？

シゲ 松の皮で戦争に勝てるわけなからうが。

トシ そんなこと言っちゃいけんよ。

シゲ 松の皮、削って、何になるんよ。

シユン

それは、先生言いよつたろうが、飛行機の燃料になるつたい。

シゲ

いくら飛行機飛ばしても、新型爆弾落とされたらひとたまりもなかる。なんや、お前。

シゲ

シユンは本当に勝てるつち思つとるん。こんなんで……勝てるよ。

シゲ

嘘や。
勝てる、勝てるよ、俺信じとるけ。勝てるよ。

トシ

信じとるつち。
うちの父ちゃんが言つとつた、こん高塔山には、軍艦が埋まつとるち。

シゲ

何それ。
山上軍艦つち言つて、そういう山なんよ。そう本に書いてあるんよ。

シユン

本当？
本当よ、父ちゃん言いよつた。

シゲ

……
信じんならいいけどな。

シゲ

じゃあ、何で松なん。
知らん。でも、その軍艦の燃料が出てきよるんやないかなつち思う。

シゲ

でも、松の油やん。
染み込んだるんよ、やけん、たくさん集めないかん。

トシ

じゃあ、じゃあ、たつくさん、たつくさん集めたらさうん。

トシ 軍艦、ならんかね。

シゲ 松の皮で？

トシ そう、ここに埋まつとる軍艦から滲み出とるけ、

シユン いいな、それ！

シゲ ここにある松全部、全部ガリガリにして！

トシ 足りん分は、根っこからも削りとろう！

シユン 全部、全部、搾り取るんや！

シゲ そしたら、勝てるかも、しらんな！

トシ そうよ！

シユン だって、こんなでかい軍艦、できるけな！

シゲ そうよ！

トシ 削るぞ！

2人 おう！

3人は、これまでとは全く違う様子で、松の皮を削る。

シゲ いいか、一番多く削ったやつが艦長や

トシ あ、ずるい！

シユン だったら、俺が艦長やな！

3人は松の皮を削っているうちに、

いつの間にか、松でできた軍艦に乗っている。

シユン

目標確認！

トシ

は！敵は憎つくき米国のB29であります！

シゲ

こっちは、高塔山に眠る、古の軍艦。米国の飛行機など、一捻りや！

シユン

あ！あれは！

シゲ

なんですか！

シユン

あっちは、敵国ソ連の部隊、

シゲ

強敵や……！！

シユン

甘えるな、シゲ！この大和にも劣らぬ大軍艦、その威力、とくとみよ！

3人

ばばばばば！！

トシ

逃げよる、逃げよるぞ！

3人

ははははは！

シゲ

もう空襲に来るなよ！

シユン

これが、若松の守りの要！松の皮とて、一大勢力じゃ！

トシ

いいのお！

シゲ

でも、でも、新型爆弾がきたらどうするんね。

シユン

そんなん、追い返してやるんよ。

トシ

でも、もし落とされてしまったら。

シユン

そんな強いんか、新型爆弾っち。

シゲ

そしたら、こっちも作ればいい。

トシ 作るん。

シゲ そうよ、アメリカに作れたんやけ、できるよ。

シユン どうやって作るん。

シゲ こんなたくさん、材料があるやんね。

トシ 松か。

シゲ そうよ。

シユン でも、もう軍艦に使ってしまつたよ。

シゲ まだまだ、削れば出てくるよ！

トシ おう！

3人は松をより一層削る。

シユン まさか、アメリカもソ連も、日本の新型爆弾があるち思わんやろうな

トシ 松、さまままや。

シゲ お前の皮が、日本のためになるんやけな！

3人は再び軍艦に乗っている。

トシ 報告！報告！当方の新型爆弾が、アメリカ、ソ連上空にて炸裂、甚大なる

被害を与えました！

シユン でかしたぞ！

シゲ これで、この戦争も終わりますね！

シュン この勝利は、最前線で戦った兵隊さんと、この国を守った国民と、そして、松の皮を削った我々少国民の手柄である！

シゲ お前（松）も頑張ったけな！

トシ 偉いぞ、みんな、よく耐えたな！

シュン 我々、大日本帝国は！本日、昭和二十年八月九日を持って、この太平洋戦争に勝利しました！

3人 ばんざーい！ばんざーい！

シゲ これで、夏休みも遊べるな！

トシ ひもじい暮らしもせんで済む！

シュン そうやぞ！

すると、どこからともなく、B 29の音が近づいてくる。

シゲ 一所懸命、松の皮削ってよかったな！

シュン 言ったろうが！信じれば、勝てるっち！

トシ そうやな！

シゲ もう空襲もこん！バンザーイ！

3人 バンザーイ！

シュン 父ちゃんも帰ってくる！バンザーイ！

3人 バンザーイ！

トシ
3人

松の皮も削らんでいい！バンザイー！
バンザイー！バンザイー、バンザイー！

B 29の音がさらに近づいてくる。

3人の万歳、の声をかき消しながら、

B 29は、小倉の街に新型爆弾を投下した。

一瞬の閃光が走り、暗闇が訪れる。

と、そこはやはり高塔山の頂上。

3人の少年は眠りかけている。

すると、3人の先生が現れ、3人をボコボコに殴っていく。

先生

シユン

ばかたれ！何サボつとるんか！
イテっ、

シゲ

あれ、あっ！

先生

3人そろって眠りかけてから！お国のために、松の皮を取らないけんぞぞ！

トシ

あれ。戦争は？終わったんやなかとですか。

先生

まだ寝ぼけてから！

先生はまた3人を殴る。

シユン

イテツ、

先生

お前たちの削る松の油が、この国を救うんぞ、分かっとなるんか！

シゲ

はあ。

先生

なんや、その気の抜けた返事は！今、この国は危機に瀕しとる。それなのに、その国を支える少国民たるお前たちがその様子でなんとする！

トシ

すんません。

先生

すんませんやなか！

また殴る。

先生

いいか！今日、また長崎に新型爆弾が落とされた。

トシ

またですか。

先生

そうたい。極悪非道なる、米国の、新型爆弾たい。悔しくないんか！お前たちが削る松の皮で、一矢報いる、そう思つて励め！

シゲ

松の皮削つて何になるんですか。

先生

なんも聞いとらんのやな、このアホ！（殴る）

シゲ

イテツ、

先生

松の皮はな、飛行機の燃料たい。それから、潤滑油。

シユン

燃料、潤滑油。

先生

そうたい。少しでもたくさん、削るんぞ。

3人

はい。

先生

なんや、その返事は！

3人

はい！

先生

じゃあ、作業に戻れ！もうサボるなよ。

先生は去る。

3人は黙っている。

シュン

ごめん。

シゲ

なんで謝るん。

シュン

俺が軍艦とか言うけ。

トシ

お前のせいやない。

シゲ

うん。

シュン

やるか。

3人はまた松の皮を削りだす。
皮を削りながら、話し始める。

シゲ

お前、父ちゃん戦争行つとるん。

シュン

うん。満州。

シゲ

そうなんや。

シユン

うん。

シゲ

ごめんな、知らんで。

シユン

いいよ。

トシ

何も言わんけど、悲しんどるんやか。

シゲ

なんの話。

トシ

松。

シゲ

知らん。

シユン

うん。

トシ

松。かわいそうやな。

3人は松の皮を削り続ける。

おわり。

退職の日

作 渡辺明男

【登場人物】

金本(男性)

平田(女性)

安木(女性)

昭和の初め。

とある百貨店の出納係である平田が主任の金本に退職の挨拶をしている。

安木はお札を縦読みで数えている。

平田 主任、いままで本当にありがとうございました。

金本 いや、ついに平田くんも嫁に行くのか。平田くんがうちの経理にいく

れたおかげで本当に助かったよ。(安木に)ね。

(数えたお札を封筒に仕舞っている)。。。。

聞こえてないかな。ね、安木さん！

。。。。

金本 まあいいか。じゃあ平田さん、元気で。ね、ははは。

平田 はい、ありがとうございます！

平田、自分の席に戻ろうとするが、

金本 稼ぐだけ稼いで辞めて行くんだよなあ…

平田 (振り向く) え？

金本 ああいや、こっちの話。

平田 はあ…。(また戻ろうとする)

金本 会社がどれだけお金をかけてきたか…女っていうのはこれだから…

平田 (振り向いて) な、なんですか？

金本 ああいや、すまん。なんでもない。

平田 なんかごによごによ言つてたから…

金本 いや、違うんだ。平田くんが辞めるのが残念でね…

平田 おっしゃりたいことがあるんなら…

金本 なんか急に寿退社かーと思つてね。ね、安木さん！(無視される)…聞こえてないか。

平田 そりゃあみなさんにご迷惑をおかけするとは思いますが、わたしだって辞

めたくて辞めるわけじゃあ…

金本 すまん、気を悪くしないで。そういう意味じゃないんだ。ただ、世の中には結婚して、子供を産んで、30になっても仕事を辞めない女はいるのになあ、と。

安木 わたしはまだ29です。
金本 聞こえてるじゃないか！ まったく…
安木 主任、謝罪してください。
金本 ううん！（咳払いして書類を読む）
安木 主任！
平田 安木さん…
安木 なによ。こういうのはちゃんとしなきゃいけないのよ。女が黙ってるから男もつけ上がるんだから！
平田 いえ、そうじゃなくて…安木さんにも色々お世話になりました。
安木 怒ってるときに挨拶しなさんな！ はい、お世話しました、お疲れ様！
平田 あの、これ…。（何か紙切れのようなものを差し出す）
安木 え、いいわよそんな、いらないうらない、こっちも餞別出してないんだから夫の写真です。
平田 余計いらないわよ！ なんであんたの旦那なんか見なきゃいけないの！すみません…。（写真を仕舞おうとする）
安木 ちよつと見せなさい。（写真を見る）あら、なにこれ。テニス？
平田 そうなんです。夫はテニスが好きで。毎日すごいスマッシュで。夜も。
安木 え？
平田 もういいですか。返してください。（写真を返してもらおう）
安木 なんなのよ。
平田 うふふ。（写真を眺めてうっとり）

金本 僕にも見せてよ平田くん。

平田 え…あ、はい。少しだけですよ。

金本 (写真を見て)なんだい。ハンサムじゃないか。

平田 そうなんです。

金本 こりゃあ幸せだね、平田くん。なるほど散々世話になった井筒屋を辞めるわけだ。

平田 …返してください。(写真をひったくる)結婚したら仕事を辞めるのは当たり前じゃないですか。

安木 ちよつと待って。なによそれ。

平田 いや、安木さんは全然辞めないですけど。

安木 わたしがおかしいみたいじゃないのそれじゃあ。

平田 おかしいかおかしくないかで言えばおかしいでしょう。普通は結婚したら家庭に入って主婦として家事をして…

安木 バカじゃないのあんた！ 結婚して、主婦をして、なおかつ働くのよ！

わたしを見なさいよ！ ずっとハイヒール履いてて小指の爪がないのよ！
結婚して家でごろごろしてるなんて負けよ！ あんたは負け！

勝ち負けじゃないでしょうに。戦争じゃないんだから。

安木 戦争よこれは！ どれだけ金を稼ぐかっていう戦争！ 売り場は戦場！
(封筒から札束を取り出す)見てごらん。(札束を机にバンバン叩きつける)

この札束にどれだけの血と汗と涙と…！

金本 安木さん、それみんなのお給料！

安木 わかった？　ここは戦場なんだから。戦争で負けたんやから、せめて金儲

平田 けでは勝たんとどげんするんかね！？　…ああ、頭がくらくらする…

金本 もうわかりましたから。

平田 まあまあ安木さん、そんなに怒らなくてもいいじゃないか。安木さんの方が井筒屋を愛してるってことなんだから。ね。

平田 え、ちよつと待って。

金本 平田くんまでなんだよもう！

平田 わたしが井筒屋を愛してないと。そうおっしゃるんですか？

金本 いやだから、そうは言ってないよ。君は井筒屋を愛してないって、

そう言ってるんだよ。

平田 言ってるじゃないですか！

安木 実際そうじゃないの。

平田 (悲しそうに) わたしがどれだけ辞めたくないか…、

どれだけ井筒屋を愛しているか…

金本 でも、実際辞めているんだから。

安木 ふがっ(鼻で笑う)話にならんわな。

平田 まわりの、親族の圧力もあるやろ…。夫もテニスで忙しいし…

わたしもいろいろあるんや…

金本 安木さんは、旦那に仕事辞めろって言われたらどうする？

安木 捨てますね！　夫を！

平田 わあっ！(泣き崩れ、夫の写真を取り出す)あなたあ！

金本 安木さんがいれば井筒屋は…いや、日本は安泰だ。次はアメリカに勝てる！
安木 大日本帝国ばんざーい！

平田 き、きちがい！（写真を見て）あなた、助けて！スマッシュ！

金本 これだよ。君みたいなのは結局最後は男に頼るんだ。安木さんを見習いた
まえ、女を捨ててるじゃないか。

安木 え、ちよつと待つて…

金本 （安木を制して）もういいんだよ！ 何回おなじことやるんだチミは！

（平田に）とにかくねえ、命を懸けて働かないやつはいらないんだよ。こ
の非国民が。安木さん、なんか棒はないか。引っぱたいてここを追い出し
てやる。

平田 ひいひい…（逃げようとする）

金本 逃げるな！

安木 棒はあれですけど…。あ、札束ならここに。

金本 ようし、札束で引っぱたいてやる。平田あ齒あ食いしばれえ！

平田 わたしは…井筒屋を愛しています！

金本 ほざけ負け犬があ。おまえみたいな軟弱者のせいで日本は負けたんだ。

安木、立たせろ！

安木 平田さん、立ちなさい！ お国のために立ちなさい！（立たせる）

平田 …わかりました。でも、処刑する前にひとことだけ言わせてください…。

安木 主任…

金本 否。

安木
金本
（平田に）否ア！
うえいおうらあ！（札束を振りかぶる）

平田、観客に向かって独白。

平田
みなさん！ みなさんは札束でぶたれたことはありませんか？ 私はありません。ぶたれた瞬間、目の前で火花がパアツと散り、入社したばかりの頃の思い出が…

入社したばかりの頃。

安木
あら、あなたが平田さん？

平田
はい、この度出納係に配属されました、平たい田んぼと書いて平田と申します。

安木
安い木と書いて安木です。わからないことは何でも聞いてちょうだいね。やっほ。

金本
あら、主任。

平田
あ、おはようございます！ 平田です！

金本
聞いてたよ。安木さん、平田くんは入社試験でトップだったんだよ。

安木
あらあ。ぼやぼやしてたら追い抜かれちゃう。

平田
馬鹿言わんといってください！ 確かに電卓は抜群に早いですけど。

タタタタタ：（電卓を打つ真似）

安木 あらやだ、いまの見ました主任。

金本 でもいい子ほど結婚してすぐ辞めちゃうからなあ。ね。

安木 イヤミですか？

平田 そんなそんな。わたしみたいなのをもらつてくれる人なんていないですよ。

金本 ははは、冗談冗談。さあ、仕事を始めようか。平田くん、井筒屋へようこそ。

平田 はい、よろしくお願ひします！ わたしここで働けてとっても幸せ…

現代に戻る。

金本 おうらあ！（札束で平田をひっぱたく）

平田 いてええ！（床にひっくり返る）

安木 はい、お疲れさん。

金本と安木、席に戻る。

平田 （倒れたまま）…あぐあ…この世というのは、生き続けると決心するには

あまりにヒドイことばかり…だがしかし主任、わたしは結婚し、家庭を持ち、子どもを産むと心に決めました。そして子といっしょに、またこの井筒屋に買い物に來ると、そう決めたのです。それは、井筒屋の、この小倉の町のためにはなりやあしませんか？ 悪いことではなかでしょうか…

金本 君は子供ができたら玉屋へ行くタイプだ。

平田 馬鹿な！（起き上がる）わたしはここで働けてまことの渡世を学んだのです。かゝ楽しかったのお〜！ 辞めたくねえんぞ、ほんとわしはあ〜！ 本来なら石にかじりついてでも…（金本に掴みかかり噛みつきこうとする）わあ！ なんだねやめたまえ平田くん！ 安木さん、助けて〜！

安木 こら、やめなさい平田さん！（平田を引き離すが、平田に噛みつかれる）あいたたた！

平田 なんてせつないんやろうか…。人生ちゃあこんなにうまくいかんものやろうか。あたしゃあまだまだ働きたかった。こうして（札束を手取る）お金を数えて、今日も売り上げ良かったねちゅうて。休みの前日にはボーリング行ったりダンスホール行ったり…

安木 そんなに辞めたくないなら、わたしみたいに仕事も子育ても家のことも親の面倒も近所付き合いもドブさらいも正月の餅つきも全部やればいいじゃないの。

平田 うるせええ！（安木を札束で引っぱたく）
いてええ！（床にずっこける）

平田 そんな、なんもかんもできるか！ 馬鹿かてめえ！
わかった！ き、君の気持ちは分かった！

金本 （息を整え）わかってくれれば、いいんです…。わたし、少々疲れましてので、早退させていただきます。

金本 早退するもなにも君は今日で退職だろう。

平田 あ、そうでした。では帰って、精の付くものを作りたいと思います。早く子供を作らないと…。(安木に)ね。

安木 がんばって。

平田 ありがとうございます。またいつか必ず戻ってきますので。

金本 …。(いやそうな顔)

平田 …え？

金本 (慌てて) いやいや、もちろん大歓迎！ 待ってるよ平田くん！

平田 はい。それでは失礼します。

平田、早足で去る。

金本 ふう…安木さん、大丈夫かね。

安木 大丈夫じゃありませんよ。札幌で引っぱたかれたんですから。おーいた。仕事めめちやくちやになってしてもてから。

安木 戦争で日本が負けたからとか言い出してからおかしくなったんですよ。

金本 僕、戦時中は軍国少年だったから。

安木 知りませんよそんなの。…あ、写真。

金本 え？

安木、写真を拾う。

安木 平田さん、写真忘れてる。
金本 …。

平田、泣きながらゾンビみたいに戻ってくる。

平田 (絶叫する) やっぱり辞めたくね〜〜〜!

金本と安木、慌てて土下座する。

金本&安木 勘弁してください!

(おわり)

サウナと熟れた恋人たち

作 渡辺明男

【登場人物】

丸尾 (69歳・男)
栄一郎 (80歳・男)
悦子 (77歳・女)
三木助 (78歳・男)
室田 (76歳・男)

とあるジムにあるサウナ。

栄一郎と悦子、座っている。

栄一郎 (タオルで汗を拭きつつ) あく、だいぶ酒が抜けてきたな…。

悦子 なん言いよるんね。まだ、だいぶお酒臭いわよ。

栄一郎 いや、ばっちりクリーンや。これで今夜も飲める。

悦子 飲み過ぎやないの？

栄一郎 あんたもたまには飲んだらいいやないの。

悦子 わたしはカラオケだけでいいとよ。

栄一郎　　そういえば、この前のカラオケよ。川崎さんと野口が、途中ですーつと消えて、ホテル行つてから。

悦子　　あらあ、あの二人、あやしかったもんね。

栄一郎　　馬鹿やけ、カラオケに老眼鏡忘れてから。あとでLINEが来たんよ。ホテルに老眼鏡持つてきてくれつち。

悦子　　なんねそれ。バカやねえ！

栄一郎　　クーラーのリモコンが見えんちゆうつて。ははは！

丸尾、サウナに入ってくる。

悦子　　みんな、ポンポンできてから。簡単。

栄一郎　　あんたも誘われよるやろ。

悦子　　なん言いよるとね。男の人と遊ぶとか、全つ然、興味ない。アホらしい。

丸尾　　…失礼します。(座る)

栄一郎　　ああどうも。

悦子　　(丸尾に見とれてしまふ)

栄一郎　　(悦子に) 遊べるうちに遊んだらよかろうがね。…聞いとる？

悦子、丸尾の隣に移動する。

悦子　　(満面の笑みで) こんにちは。

丸尾 ああ、どうも。

悦子 よく来られるんですか？

丸尾 いや、このサウナは初めてです。

悦子 やっぱり。あまりお見かけしない方だから。わたし、しょっちゅうこの

サウナに来るから、大体の顔は知ってるんです。

丸尾 ああ、わたし、関東に住んでいたんですが、出身が北九州でして、最近

悦子 こっちに帰ってきたもんだから。

丸尾 あら、お仕事かなにかで？

悦子 いや、仕事は左官屋だったんで、あれなんですけど…。

丸尾 え、左官屋…。(つぶやくように)左官屋…。

悦子 もう辞めましたがね。今は息子の家に。

丸尾 …あ、わたし、実は、ね、その…

面白くない様子で丸尾と悦子のやり取りを見ていた栄一郎が、割り込
んでくる。

栄一郎 (丸尾に) どうも、こんにちは。

丸尾 ああ、どうも。

栄一郎 あんた彼女います？

丸尾 彼女？ いや、女房はいましたけどね。

栄一郎 女房と遊んでどうするの。鬼ババアでしょあんなの。彼女彼女。わたし

ね、3人いるんですよ、仲良いのが。

丸尾 ああ、そうですか。3人…。

栄一郎 車は？ 何乗ってんの。

丸尾 え？

栄一郎 俺はね、レクサス乗ってますよ。レクサス。

丸尾 車はもう乗ってませんね。年も年だから。バスに乗ってますよ。

栄一郎 ふくん。バスね。じゃあバイアグラ飲んでる？

丸尾 飲んでませんよ、そんなの。

栄一郎 俺の勝ちだな。

丸尾 何が。

悦子が、嬉々とした顔で、丸尾に語りかける。

悦子 わたしね！ 初めて恋した相手が左官屋さんだったんです。初恋！ 左官

屋！ ね！

丸尾 聞こえますよ。

悦子 でもね、母に反対されたんです。製鉄所の人じゃなきゃダメって言われ

て。それで…

丸尾 製鉄所。八幡の。

悦子 当時すごい勢いあったから。もうね、飛ぶ鳥をぶち落とす勢いっつーの？

丸尾 それで製鉄の人と結婚されたんですか。

悦子 いや、別の左官屋と結婚しました。

丸尾 なんだそりゃ。

悦子 いやでもすごい偶然だなくと思つて。左官屋つながりというか。縁がある

わく。ちよつと筋肉触つてもいい？

丸尾 何なんださつきからあんたら。失礼だろう。あんまり近づくんじやない。

距離が近いんだよ。

悦子 あらごめんなさい。つい、いつもの感じで。このサウナはね、いわば

サロンみたいになつてるの。わたしたちみたい年長者が集まつて、しゃべつたりしてね。サウナの後もカラオケに行つたり。

栄一郎 ホテルに行つたり。

それはあんただけでしょう。

悦子 俺だけじゃあねえよ。野口やら川崎さんやら、おかまの三木助やら、みんなポ
ンポンポンホテル行つとる。ポップコーンみたいに跳ね回つとるわ。

丸尾、驚愕の表情で栄一郎を見つめる。

丸尾 …嘘だろう。

栄一郎 嘘じゃねえよ。さつきまでおつた田口さんは、仁科さんと別府のグラウンド

ホテル行つてから…

悦子 もういいっちゃ！（丸尾に）ごめんなさいね、下品で。でも実話。

丸尾、動揺を隠せない。

丸尾 信じられん。俺がしよぼくれた男だから、からかつてるんだろう。

栄一郎 逆だよ。お前ぐらい男前なら、たくさんのばあさんとやれる。

丸尾 やりたくねえよ！ 年寄りがホテルに行つて、何をどうするんだ。

栄一郎 べちやべちやするんだよバカ野郎！ だいたいおめえだつて年寄りだろ

うが。いくつだお前。

丸尾 69だ。

悦子 わか〜い！

栄一郎 なんだよ、若僧じゃねえかおめえ！ 俺は80だぞ、土下座しろ！ 焼肉

行くぞ！

丸尾 肉なんて噛めねえよ、もう。

栄一郎 俺だつて噛めねえよ。丸飲みだよ！

悦子 まあ〜でも、若い人が入つてきて、嬉しいわ〜。このあとカラオケ行くわ

よね？ はい決まり。

丸尾 冗談じゃない。断る。そんな集まりに誰が！

悦子、丸尾の手をそつと握る。丸尾、動揺する。

悦子

うふふ。さつきは恥ずかしくて言えなかったけど、年下の男の子なんだって思ったら、なんだか言えそう。あのね、あなた、すごく似てるの、わたしの初恋の人に。

丸尾

…。

悦子

とつても素敵よ。

丸尾

…いや、俺は…

丸尾と悦子、見つめ合う。

栄一郎

何照れてるんだよ、この野郎！（嬉しそう）真っ赤じゃねえか！

丸尾

ここはサウナでしょうが。

栄一郎

惚れたんだろう。ぶっこんでいいぞ。女房には黙ってりゃいいんだよ。

悦子

ちよつと栄一郎さんったら。（まんざらでもない）

丸尾

…女房は、もう死んだ。

栄一郎

だったらなおさらぶっこんでいいよ。悪いことは言わん。バイアグラ飲め。

丸尾

放っておいてくれ。あんたらが何をするのも自由だが、俺は一人でゆつくりと過ごしたいんだ。

栄一郎

面白くねえ奴やなあ。せっかく親切で誘つとるのによ。

丸尾

余計なお世話だ。年寄りの集まりなんて、みつともないだけだろうが。

栄一郎

なんだと。

悦子

栄一郎さん。

栄一郎

みつともないだ？

悦子

(丸尾に)ごめんなさいね。強引に誘っちゃって。

栄一郎

おい、みつともないってなんだよ。俺たちのどこがみつともないんだよ。言ってみろこの野郎。

サウナ内に険悪な空気が流れる。

そこへ、三木助と室田がサウナに入ってくる。

室田は松葉杖をついている。

三木助は、足腰が悪いのか、歩みがおぼつかない。

三木助

(自分の尻を出して)あゝ、やだ。お尻があざになってる。

室田

三木助ちゃんが悪いのよ。あんなひどいこと言われたら、そりやお尻叩くわよ。わたしだって叩く時は叩くんだから。

三木助

だから誤解だつてば、もう。人の尻をぺちぺちぺち。何が誤解よ。だったら言い訳してみせなさいよ。

三木助

だからそれはあれよ。魔が差したというか…カマが差したというか。あら室ちゃん、足どうしたの？

室田

ちよつと聞いてよ、えっちゃん。この人、わたしが足を怪我した途端、「別れよう」だって。介護したくないもんだから。(丸尾を見て)あら、いい男

ね〜！

三木助

だから、そういうことじゃないのよ…(丸尾を見て)いい男ね〜！

室田 あんたは色めかなくていいのよ。

三木助 いいじゃないの。あんたとはもう別れたんだから。

室田 この浮気者。ブス！

三木助、意に介さず、嬉しそうに、しかし、よろけながら、丸尾のそばへ。

丸尾は、初めて見るおかまの老人に衝撃を受け、身を硬直させている。

室田 ちよつと、まだ話は終わってないでしょ！（悦子に）ねえ悦子さん。おか

まは情が厚いつてあれ嘘ね。こんな薄情なおかま、初めて見たわ！

悦子 え、ええ…。

三木助 うるさいわねえ。しつこいおかまも最低じゃないの。（丸尾を見て）この

方、見ない方だけど。

悦子 え、ああ。最近、北九州に越してきた方で…

三木助 あらやつぱり。カラダが汗に濡れてて、抜群にいやらしいじゃないの。

栄一郎 おい、やめとけ。こいつはよ、俺らの集まりには入りたくねえってよ。

三木助 そりゃそうでしょ。あんた下品だもん。

栄一郎 お前の方が下品だろうこの野郎！

三木助 あんたの強引な口説き方じゃダメなのよ。こういうウブなタイプは、ソフ

トに行かなきゃダメ。（丸尾の様子を見て）ほら見て緊張しちゃって。お

じいちゃんのおかまは初めて？かわいい。わたしの介護してくれる？

室田 ほらやっぱり。介護してほしいだけじゃない。介護だったらわたしがするつち言いよろうが！

三木助 それじゃあ老々介護じゃないの。

室田 ひどい！ 死んでやる！（泣き崩れる）

三木助 76なんだから、いいんじゃない？（丸尾を見て）やっぱりこういう若い人に介護してもらわなきゃ。

丸尾 なんとも、醜いな。

三木助 なによそれ。おかまにジビってんの？

丸尾 こういふ年の取り方をするくらいなら、死んだほうがましだね。

三木助 ちよつと待ちなさいよ。ひどい言われようね。

三木助、丸尾の肉体を撫ぜる。

丸尾、三木助の腕をねじり上げ、突き飛ばす。

三木助、よろけて尻をつく。

丸尾 乳首を触るな！

室田 三木助ちゃん、大丈夫？

三木助 これ以上、介護認定が進んだらどうすんのよ！ やだもう！

悦子 左官屋さん…。

栄一郎（丸尾に）おい。（三木助を指して）今のは、あいつが悪い。

三木助 ええ！？

栄一郎

けどな、俺はこいつらをいい仲間だと思ってる。お前から見て、どんなにみっともなくてもな。(三木助にむかつて)たしかに醜いよ。無様だよ。そりゃあひどいもんだよ。(丸尾に)でもな、お前みたいにかっこばかりつけるのも馬鹿じゃねえか。なんでそんなに頑固なんか、俺はそれが知ってるよ。

丸尾

…。

栄一郎

水風呂入って、(股間を)しゃきつとしてくる。お前もあんまり我慢すると、のぼせるぞ。

栄一郎、サウナから出ようとする。

三木助

ねえ、あざになってない？(尻を出す)

栄一郎

尻を出すな。

栄一郎、サウナを出ていく。

悦子

ふー、熱い熱い。

丸尾

…あんたは出ないのか。

悦子

あんたじゃなくて悦子って呼んでちょうだい。やっと二人きりになれた。

室田

わたしたちいるのに失礼しちゃうわね。(三木助に)ね。

三木助

お尻、あざになってない？(尻を出す)

悦子、じっくりと丸尾を見据え、話し始める。

悦子 わたしもね、ニコニコしてるけど、あなたのさっきの態度見て、腹が立つ

とるんよ。

丸尾

…。

悦子 一人で過ごしたいとか嘘ばかり。この年でさびしくないわけないやないの。

悦子、丸尾をじつと見つめる。

丸尾、やがて観念し、ぼつぼつと話し始める。

丸尾 俺は、とつととくたばって、早よ女房のところに行きたいんよ。

悦子

…。

室田 かく。なにいつまでも引きずってんのよ。

三木助 ね。新しい女か男、見つけなさいよ。

丸尾 そういうことじゃない。もう生きていても仕方がない。そう思ってる。

三木助 なによそれ。精神が参ってるんじゃないの？

室田 病院行きなさい。

悦子 二人とも。向こうへ行って。

三木助 あっそ。じゃあ二人きりでどうぞ。

室田 汗かきに来たのに。

三木助　いいわよ。むこうでいちゃいちゃしてたら自然と汗かくわよ。
室田　それ最高やねえ、三木助ちゃん。

三木助と室田、サウナを出て行く。
が、栄一郎と三木助と室田、こっそり戻り、サウナを覗いて聞き耳を立てている。

悦子　…奥さん、いい人やったんやね。
丸尾　いま考えたら、そうやなあ。でも…
悦子　うん。

丸尾、苦渋に満ちた顔。

丸尾　女房も俺みたいなのと一緒につまらんかったやろうなあつち、そう思いよる…。

丸尾、汗を拭くふりをして、涙を拭う。

悦子　わたしも過去を振り返ることがある。初恋がうまくいってたらどんな人生だったろうって。ダメになった時は泣いた泣いた。でも、いまはこのサウナで、涙やなくて、汗流しよるんよ毎日。

悦子、さりげなく丸尾を抱きしめる。
栄一郎たち、驚きの表情。そして歓喜。

悦子

楽しむなんて、簡単よ、簡単。

丸尾

あんたらのようにはできんわ、俺は。

悦子

うん、うん。

悦子、丸尾から離れ、サウナから出て行こうとする。

悦子

水風呂入ってくる。

丸尾

…すまん。

悦子

あやまることない。

丸尾、ためらいながらも、悦子に声をかける。

丸尾

あの、

悦子

なに？

丸尾

さっきのやつに謝っておいてくれんか。

悦子

(笑って)自分で謝ればいいやないね。どうせサウナで会うんやけ。それとも、もうここには来んの？

丸尾
悦子

…。
後でもう一度、カラオケに誘いに来るけん。いい？

丸尾、頷く。

悦子、両腕を上げ、ガッツポーズを取りながら、栄一郎たちのもとへ。
栄一郎、三木助、室田、歓喜の表情。

丸尾以外全員でサウナをのぞき込み、様子をうかがう。

丸尾

(しばらく思索して)カラオケか…。何年ぶりやろか…。

丸尾、不器用に歌を口ずさむ。

その様子を見て、互いに喜び、抱き合う栄一郎たち。

(おわり)

【令和元年度 公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

「Re:北九州の記憶」

日程：令和元年10月13日(日)・14日(月・祝) 14時 会場：北九州芸術劇場 小劇場

【構成・演出】 内藤裕敬(南河内万歳一座)

【作】 穴迫信一(ブルーエゴナク)、鵜飼秋子(さかな公団)、坂井彩(じあまり)、寺田剛史(Black)、

山口大器(劇団言魂)、渡辺明男(バカボンD座)

【インタビュー協力】 阿部重夫さん、稲垣禮子さん、江藤綾子さん、大我俊輔さん、坂本公美さん、島由美さん、

杉本悠喜子さん、中尾直代さん、渡辺益夫さん

【出演】

青野大輔(非・売れ線系ビーンズ)、飯野智子(バカボンD座)、鵜飼秋子(さかな公団)、
内山ナオミ(飛ぶ劇場)、佐藤恵美香(飛ぶ劇場)、セクシーなかむら(若宮計画)、高山実花、
寺田剛史(飛ぶ劇場)、野村法可(有門正太郎プレゼンツ)、平嶋恵璃香(ブルーエゴナク)、
森川松洋(バカボンD座)、山口大器(劇団言魂)、渡辺明男(バカボンD座)

「スタッフ」

照明・磯部友紀子*

音響・横田奈王子*

衣裳・内山ナオミ(工房MOMO)

演出部・小笠原敬子

照明操作・木原絵美*

音響操作・塚本浩平*

舞台監督・谷川哲朗*

演出助手・穴迫信一(ブルーエゴナク)

宣伝美術・トミタユキコ(ecADHOC)

広報・金子美紀*

票券・村田理華子*

制作・吉松寛子*、秋山夏未*

プロデューサー・津村卓*

主催：(公財)北九州市芸術文化振興財団
共催：北九州市
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 一 独立行政法人日本芸術文化振興会
企画・製作：北九州芸術劇場